

---

# 幻想少年

\*amin\*

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻想少年

### 【著者名】

\* amano\*

### 【ISBN】

N4292N

### 【あらすじ】

好きになった人は私の全てを見ても好きでいてくれるのだろうか。

\* 夢想少女と話がリンクしています。この方はヒロインサイドの物語です。

## 1 彼の名前は一之瀬春哉

「どうしてあんたが残ったのよーあんたは幸じゃないー幸を返してああ否定するんだ、あたしを。全てを捨てて自殺しようとした臆病者の倉田幸だけ見てるんだ。

じゃああたしは何者なの?倉田幸って誰?

そう言って泣き叫んだ母さんは、いつもの母さんじゃなかった。ああ否定するんだ、あたしを。全てを捨てて自殺しようとした臆病者の倉田幸だけ見てるんだ。

### 1 彼の名前は一之瀬春哉

あれから何年経つたつけ?思い出せない。でももう一人の幸は未だに眠ってるし、母さんも大分落ち着いてきた。今のところは安定している。

対人恐怖症なもう一人の倉田幸を起こさないために、極力人との関わりを自ら断つた。そのお陰で皆があたしを疎ましがつている。特に女子が。

母さんは若いころすゞしくモテたって話を聞いた。その母さんの容姿の遺伝なのか、いつのまにか氷のマドンナってあだ名をつけられて、見た目だけで男が寄つてくるようになった。

うざつたい奴ら。そしてまた1人。

「あのつ……俺、一之瀬春哉って言つんだ!えと……ずっと好きでした!良かつたら俺と付き合つて下さい!」

今月は告白2回目か。もつ相手の名前も覚えるのも面倒だ。しかも

この男に見覚えはない。

同じ学年みたいだけどクラスも違うし、正直言つて勝手に見られて勝手に好かれてるなんて気持ち悪い。この手の男は皆同じ。あたしを見た目だけで判断してる。そんな奴とかかわるもの億劫だ。

「悪いけど付き合えない」

バッサリ切り捨てたあたしに男は露骨にショックを受けた顔をして固まってしまった。

相手にするのも面倒だったから、あたしはそのままそいつを置いて教室に戻る事にした。

あんたみたいなのは普通の女子と付き合つて普通に生きたらいい。どうせあたしの気持ちなんてわからない。

教室に戻ったあたしにクラスメイト達の視線が向く。そしてヒソヒソと話している女子の横を通り過ぎたあたしの耳に聞こえてきたのは中傷。

「マジで愛想悪いよねー倉田つて」

「調子のつてんだよ。少しモテるからつて」

モテるってそんなにいい事? 正直あたしから言わせてもうえば、あんたたちの方が羨ましい。

あからさまに見せつけるかのように左手の薬指にはめられてる指輪。ブランドじゃ無さそうだけど、それでも好きな人に貰えば価値あるものに変わる。

そんな人がいるのに、なんでモテる事を望む? 好きな人が自分を好きでいてくれたらそれでいいじゃない。

きつとあたしにそんな相手は現れない。もう一人の倉田幸の存在を

知れば皆気味悪がる。

それは初めての彼氏だつたあいつだつてそうだつた。

誰も信じない。あたしは1人でも生きていける。自分の全てを明かす真似はせず、表面上だけ繕つて……樂と言えば嘘になるけど、気味悪がられるよりは数千倍増しだ。

あんた達はいいよね。毎日楽しそうで。

その思いを込めて視線を送つたら、相手は一瞬肩を震わし、あからさまに目を逸らした。

放課後になり、他の生徒たちが帰つて行く中、あたしは寄る所があつた。

今日は診察夜からだし、少し時間を潰さなきゃいけないわけだけど。家に帰るのも面倒だから渋谷にでも行こうかな。

席を立ちあがつて、病院に向かつまでの時間潰しのプランを考える。でも特に何も浮かばず、結局渋谷でウインドウショッピング。

同じ高校生がいっぱい集まつての渋谷を1人で回る。

こういう時間は嫌いじゃない。好きなものを好きなだけ見れる。

案の定あつという間に時間は過ぎ、診察の時間になつたあたしは病院に向かうこととした。

病院は相変わらず混んで、1つの椅子に腰掛けて自分の名前が呼ばれるのを待つ。

医療事務の人気が名前を呼んで、会計を事務的に済ませていく。

「お大事に」なんて口では言いながら、本当は何も思つてないんだろうな。だつて言つた後にすぐ視線を逸らして金の計算し始める。病院だつて商売だ。医療事務だつて一緒。医師だつて看護師だつて薬剤師だつて商売だ。

口では何とでも言いながら、治そなんて心から思つてる奴がどれ

だけいるの変わらない。

自分の名前が呼ばれて診察室に入る頃には、もう3～4人しか患者は残っていなかった。

「こんばんは幸ちゃん。具合はどうだい？」

「いえ、悪くはありません。いつもと同じです」

「そうか、それは良かつた」

少し年老いた医師が「口」愛想笑いをしながら、カルテに色々書きこんでいく。

何か思い出す事はない?とか周りの様子は?とか、言ったといふであんたに何ができる。

周りの様子?そんなの最悪に決まってるだろ?。だから誰ともかかわらず、一人でやつてるんだ。

今日だつて母さんはきっとわたしを待たずにさつさと「飯を食べて、風呂に入つて寝てるだろ?。わたしの事なんてまるで忘れてしまつたかのように生活してるに決まってる。

そつ考えれば悔しくて手が震えた。それを見た医師は眉を下げた。

「幸ちゃん、落ち着いて。お母さんとは少し会話をしたかな?」

「はい、最低限の会話をならしてます。捨てられたら困るんで。でも向こうはあたしの事をもう忘れたがってるんですよ。それだけは分かります」

「幸ちゃん……」

「だつて未だに言つてくるんですよ。無意識なのかもしれないけど、幸はこれが好きだったよねつて言つてオムライス出してくるんですよ。それを好きだったのはあたしじゃなくともう一人の倉田幸なのにー」

語尾が荒くなつたあたしを医師が慰めようとしてくる。でもそれが

憎たらしい。

「可笑しいでしょ？笑えるでしょ？」の事他の患者に話したら、きっと皆うつ病だって治るよ。家族に忘れられた子がいるんだよって。だから君はまだ不幸じゃないよって！」

「幸ちゃん、そんな事しないよ。辛かつたね……」

「馬鹿にしないでください！辛いなんて先生に何が分かるんですか！？ただお金もらって事務的に言つてるだけでしょ！？」

他の患者と違うと思つてた。自分は精神病じゃないって。うつ病の人のように切れ散らかしたりしないし、塞ぎここんだりしないって思つてた。でも今のあたしは何だらつ。これじゃ確実に……俯いたあたしの頭を医師が優しくなってる。

「確かにお金は受け取つてるけど、先生は幸ちゃんが元気に過（）してほしいうつ病の人のように心から思つてるよ。それはもう一人の幸ちゃんじゃない、君の事だ」「…………」

「その為にも、お母さんと少しでもコモニケーションを取らないと。今度お母さんを連れておいで。先生と3人で少し話をしよう」「…………はい」

医師はにっこりと笑つて、この間のテレビ面白かったね。と話しだした。

あたしが前に好きだつて言つてたバラエティを医師は覚えてくれていたようだ。

この人だけは違う。あたしを理解してくれる。例え同じような事を何十人に言つてたとしても、この人だけは……

診察も終わり、会計をするために待合室に向かつたあたしの視界に

入ったのは、今日告白してきた奴だった。

案の定、向こうも驚いた顔をしてあたしを凝視している。

「え、倉田さん……」

「あ

こいつ名前なんだっけ？忘れたけど顔は覚えてる。

なんでこいつがここに？ここは内科だけど心療内科なんだけど。でもそれ以上にヤバいと感じたのは、この事を高校の奴らに言つたらされたらどうしようつと言つ焦りだつた。

振つた腹いせにやられるかもしれない。そんな事になつたら終わりだ。

上手い事も言えず口から出たのは齧しのよつな言葉だった。

「誰にも言ひなよ」

「え？」

「ここにあたしがいる事。誰にも言ひな」

「や、それはわかってるけど……何で倉田さんはここに？」

それをあんたが知る必要はない。とりあえず、こいつの質問はスルーして礼だけ言つとこした。

「ありがと。言われると困るんだよね」

「そりやな……」

「あんたは何でここに居るの？」

逆に質問すれば、悲しそうにそいつは顔を俯かせた。この表情を知つてる。母さんがした事があるから。

足が縫い付けられて動かなくなつて、気付いたらこいつが返事をす

るのをジッと待っていた。

「家族の迎えだよ」

「…………そう」

そう言って笑つたこいつに胸が締め付けられた。あたしの母さんもこんな風に笑つて理解してくれたら。

制服に縫われた名前を見て、改めてこいつの名前を覚えた。  
それ以上話す事もなく、名前を呼ばれたあたしは会計を済ませて病院を出た。

一之瀬…………もう少し話してみたい。あたしの事を理解してくれるかもしれない。話し相手がほしい。  
振った相手に頼める内容じやないけど、でも彼なら引き受けてくれる気がした。

「話したい…………」

ねえ、貴方の事を教えて？

そうしたら私の事も教えてあげる。

## 2 優しい貴方に

家に帰つたらやつぱり思つた通りだつた。リビングの電氣は消えて、寝室の電氣しか付いていなかつた。テーブルに置かれたご飯は既に冷たくなつており、なんだか食べる氣も起らなかつた。

### 2 優しい貴方に

結局ご飯も食べずに風呂に入つて寝たあたしは、次の日の朝は空腹に見舞われた。

母さんに最低限の事を話して、作ってくれたご飯を食べて家を出た。朝も少ししか食べなかつたし、昼まで持つかな?弁当買ひついでにお菓子も買おうかな。

コンビニによるために毎朝少し早く出る。今日はなんの冷麺にしようかな。

この時間、通学路に面してゐるコンビニにはあたしと同じ制服の学生や、同じ通学路にある違う高校の生徒が多い。冷麺をジッと見ると、不意に誰かとぶつかつて持つっていたポッキーを落としてしまつた。

「あつ……」

「あーすいません!」

少し大きな声で謝つてポッキーを拾つて渡してきた男の子、オレンジに近い茶髪に耳に開けられたピアス。

少しだけ幼く見えるから多分高校1年生なんだね。制服が違うか

少し大きな声で謝つてポッキーを拾つて渡してきた男の子、オレン

ら桜ヶ丘の生徒だ。

小さく頭を下げてポツキーを受け取つたあたしに、その子はもう一度頭を下げるで冷麺を選び出した。

「広瀬ー何してんだよ～お前マジでドジだよなー」

「うつせ。お前から言われたくなえつつーの。大体お前今日部活どうした」

「今日は朝連ないんだよな～。でもまさかここで広瀬に会うつて思わなかつたし」

「お前がコンビニでジャンプ読んでるの見た時、マジ俺だつてびびつたわ。ジャンプどうだつた？」

「え、やばいんですけど。エース死んだんですけど」

「マジ！？でもなんかあれ死亡フラグ立つてたもんなあ……ちょっと中谷なんとかしろよ」

「俺がルフィだつたらきつと助けてたのに……」

「いやお前ウソップ程度がお似合いだつて」

「じゃあお前はチョッパーだな」

「……俺は既に人外か」

何だか少し微笑ましい会話をしながら隣の子は冷麺を選んでいる。その横ではエナメル製のスポーツバッグを抱えている短髪の男の子。野球部が背負つてるバッドを入れる鞄も持つてるから、多分野球部の子なんだろう。

隣の子は冷麺を一つ手にとつて、その子と一緒にレジに向かつて行つた。

特に食べたいって冷麺もなかつたし、今日はあの子と同じのにしてみようかな。

そう思つて、同じのを取つてあの子たちの後ろに並んだ。

「」チキとから揚げ君のレッドーつお願いしますー。」

「中谷お前どんだけ食うんだよ。お前いつもモトケヒ2段弁当食つてんじやん。しかもお前パンも買つんだろ」

「え？」チキとから揚げ君はH.R.が始まる前に食つて、このパンは2限目が終わつて食うんだ

「しかもお前いつも売店でパン買つてんじやん」

「だつてもたねえし、あー会計はこいつのと一緒にでー」

「待て！俺に奢れつて言つのかよ！」

「だつて俺小遣い前で金ねえし。全財産今400円だし。これで3日間乗り切らなきゃなんねえから」

「最初から払わす氣だつたな……てめえ覚えとけよ」

あたしだつて持つてないのに、ポケットからG.I.C.C.Iの財布を取り出して、その子が自分の冷麺と友達の分のお金を払う。店員はおばちゃんだったから、2人のやり取りを微笑ましそうに見ていた。

奢つてもらつた子は勢いよく頭を下げてお礼を言つた。少しげんきんだけど、明るくて面白そうな男の子だ。

「よおしー朝の食糧は調達ー昼は桜井達に払つてもらつて一部活行く前に池上に売店でお菓子買つてもらつて一部活帰りは栄太達にコンビニでなんか奢つてもーらおー」

「お前どんだけたかる気だ……」

「まあまあいいじゃん 早く行こりザーー！から揚げ君が冷めちゃう

「奢つたんだから一つ寄越せよな

「いーよー

2人は笑つて話をしながら自転車に乗つて行つてしまつた。

楽しそう、あたしとは大違い。あんな風に笑いあえる人がいたら、きっと学校も楽しいだろうに……

そう思いながら、あたしはコンビニの袋をぶら下げる学校に向かつ

た。

昼<sup>じ</sup>はんは教室で食べて、そのままのんびりしてたけど、5限目が嫌いな社会と言うのを思い出して、あたしは逃げるために屋上に向かつた。

授業開始10分前を切っていたので、屋上に人はもう少ない。授業なんて出なくてもいいや。親が担任にあたしは精神病つて相談してるから、先生たちは下手にあたしに何も言つてこない。自殺でもされたら敵わないからね。

放つておかれるのは慣れっこだ。今更構われても鬱陶しいだけ。今の状態が一番楽だ。

次第に人は減つていき、ついに屋上はあたしだけが残つていた。真夏の暑い屋上で、影のある所でボーッとする。影がある所で動かすにいたら、汗をかく事はないし丁度いい。

そのままボーっとしてたら屋上の扉が開いた。あたしと同じさぼりに来た奴かな？ そう思つて振り返つたら、そこには昨日の男子の姿だった。

一之瀬だ……

そう心で呟いて、彼をじっと眺めていたが、何だか氣恥しくなつて隠れてしまつた。

一之瀬はケータイを忘れたらしくて、見つけたことにホッとしていた。

このまま帰っちゃうのか。折角話そつと思つてたのに……でも話し

かける勇気もないし、まあいいか。

そう思つていたら目の前に影が見えた。顔を上げた先には一之瀬の姿があつた。

「倉田さん」

「あ、あんたこないだの……また会つたね」

あくまで平静を装つて知らなかつた振り。あたしの返事を聞いて、一之瀬は少し困つたような顔をした。

そんなきまづそうにするなら話しかけてこなかつたらよかつたのに。何か言いたい事でもあるのかな? そう思つて一之瀬が話すのをジッと待つた。

「授業は? もう始まるけど」

「出ない。今日はそんな気分じゃない」

どうしてもう少しオブリークトに言えないのか。完全に一之瀬縮こまつてんじやん!

もう聞く事がないのか、いかにもこの場から去りたいつて顔をしてるのに、少しだけむつとなつた。

でもあたしは話したい事がある。ねえ、お互に相談相手がほしくない?

あたしは遂に話を切り出すことにした。

「昨日ああ、家族の迎えつて言つてたじやん。家族何か病気なの?」

「そう言つのはちょっと……」

「ああ、『じめん。悪氣はなかつたんだけビシ、あたしとあんた同じかなあつて思つて』

案の定、一之瀬は困つた顔をして教えてはくれなかつた。でもあたしは更に追求するように、話を引き延ばした。

興味を持つてほしい。痛みに気付いてほしい。慰めてほしい。1人じやないつて実感させてほしい。

あたし達はきっと似た者同士だと思うから。

やつぱり一之瀬もあたしの精神疾患を気になっていたのか、話に食いついてきた。

「倉田さんこそ何で行つてたんだ? 倉田さんも……その  
「半分あつて半分間違い。あたしは何の疾患もない  
「じゃあ……」「あるのはもう1人のあたし」

分からないうつて顔をした一之瀬が少し可笑しい。まあこの言い方じ  
やわからないよね。  
あたしが二重人格だつて、きっと一之瀬は思つてない。うつ病か何  
かだと思つてそつだから。

「昨日あんた見てさ、あたしと同じだと思つたんだよね。めんどい  
よね、精神病患つてる奴つて」  
「そんな言い方……好きでそくなつてんじやないだろ。奴とか言つ  
なよ」

「優しいね。あたしは嫌いだよ。面倒くさいし、ムカつくし、邪魔  
だし」

「倉田さん!」

あんたは優しいね。あたしはそんな風に優しくなんかなれないよ。  
倉田幸は憎たらしい。自分からあたしを作つておいて、平氣であた  
しをこの残酷な世界に1人だけ投げ捨てた。

おかげで今あたしがどれだけ苦しい思いをしてるかも分からずに、  
すやすやいつまでも寝続けやがつて。

あんたはそれでいいかもしれないけど、あたしは疲れてるの。あた  
しだつて少しくらいはいい思いする権利あるでしょ?

「ね、あたしあんたになら色々話せる気がするんだよ

「話せる?」

「相談できないんだよ。自分の事、誰にも。同じ悩みを持つてる奴じゃないと」

「……」

少しだけ考えて一之瀬は頷いた。

やっぱり一之瀬だって相談する人欲しかったんでしょう?」「うう事、普通の友達にだつて中々相談できないもんねえ。

一之瀬が腰かけたのを見て、早速本題に入ろうと促した。

「じゃあ話を。どうせ授業ももう始まってるし、あんた入れないっしょ?」

「誰のせいだよ」

「細かい事言わないの。まずはあんたからね」

あたしがそう言えば、一之瀬はすっと我慢してたのを爆発させるかのようにマシンガントークをし出した。

母親がうつ病で辛い。進学できるかが不安だ。いつ母親が治るか分からぬ。今の生活が正直言つてきつい。母親を見るのが辛い。そう言つて泣きそうになつて話す一之瀬には純粹に母親を心配してゐる。

まあその中に少しだけ進学とか自分にかかる事が入つてゐるあたり、ちやつかりしてゐるんだろうけど。

でも母親が治つて欲しいって心から思つてゐる。やっぱりあんたは優しい人だよね。

そんな一之瀬になんて答えたらいいか分からず、とりあえずティッシュを投げて、先生の受け売りの言葉を投げかけた。

「難しいよね。そういうの……相手の心が読めたらいいのに」

「それ思うよ。心理状態マニアル本が欲しいよな」

「欲しい欲しい！そしたらあたしも……」

「倉田さん？次はそっちの番だぜ」

言葉に詰まつたあたしに、一之瀬は首をかしげてあたしの話を待つている。

そんな一之瀬にあたしは忠告した。

「気味悪がらない事。いいね？」

「え？ う、うん」

口ではそう言つたけど、なぜか一之瀬は大丈夫だと心の中で勝手に思い込んでた。なんでかは分からぬけど……

「倉田幸は幼いころに父親に虐待を受けてた。身体的なものも精神的なものも性的なものも」

「……」

「母親は気付いてくれなかつた。倉田幸が泣きついてもね。そして父親の虐待の恐怖から逃れる為に、倉田幸にもう一つの人格が生まれた。無意識に父親に会つ時はその人格を前に押し出して隠れる事で倉田幸は平穀を得てた。結局父親と母親が離婚して母親に引き取られたから今は交流ないけどね」

「それって……二重人格……？」

ここまで言えば分かるか。

一之瀬は目を丸くしてあたしを凝視している。信じられないことでもいった顔をして。

そう、あんたの言つた通り、あたしは二重人格だよ。認めたくなんかないけどね。でももう少し聞いて、話はまだ終わつてないから。

「一度出た人格は消えない。無意識に作りだしたから倉田幸はもう

片方の人格の存在に気づいてない。だから第2の人格が出てる間の記憶がない事に恐怖を抱きだした。記憶が抜け落ちてる自分に……」

「……」

「そして倉田幸は自殺を決意した。飛び降りをね。それを寸前の所であたしが止めたんだよ。それ以来眠つてる」

「じゃあ今の倉田さんは……」

「そう。あたしの方が第2の人格つて事。本当の倉田幸は眠つてる。ずっと、何年間も」

幸、あたし初めてあんたを他人に紹介したよ。あたしの恥もあるあんたをね。

一之瀬は難しそうな顔をしてる。ああ、もしかして気味悪がってる？それともあたしを偽物だつて思つてる？

「あんたもあたしが偽物つて思う？倉田幸の偽物」「え？」

「あたしは第2の人格、本人格じゃない。母親はあたしが二重人格だつて事ももちろん知つてる。言われたの。偽物が表に出るなつて。本物を返せつて」

自分で言つても思い出しても胸が痛む言葉。自然と感情的になつて早口になつていぐ。

「あたしはもう1人の倉田幸。演技なんかじゃない。本當にもう1人の自我。だけど母親はそれを分かつてくれない。全てを逃げだして自殺しようとした卑怯者が本物つて言つんだよ。あたしは偽物の一言で片づけられる。今は言われる事はないけど、きっとそう思われてる」

「……俺は今の倉田さんしか知らない。だから今の倉田さんが倉田さんとしか思えない」

「そう」

「俺のお袋はさ、うつになつてから自分が必要じゃないと思われる事に以上に怯えてる。役に立たないって……」

「……」

「でも役に立たない人間なんている訳ないし、ましてや家族を……」「あたしは言われた。それは本物の人格だからだよ。あたしは後から生まれた人格、母親のお腹から生まれた訳じやない。倉田幸の精神がアメーバみたいに分裂してあたしが生まれたんだ。だから母親は自分の子供じやないと言つてあたしを嫌う」

「じゃあ友達でも作ればいいだろ。そしたら必要としてくれる人が出来る。何で友達を避けんの？」

「倉田幸を起こさない為だよ。こいつは極度の対人恐怖症だから。起きたら泣き喚きだす。あたしなんかが抑えれる存在じやない。だから眠らせとくんだ。ずっと静かに」

まくしたてるように言えば、一之瀬は悲しそうな顔をしながらも、どこか受け入れてくれるような顔をした。

やつぱりこの人ならあたしを理解してくれる。この人の前ならあたしはあたしでいられる。そう感じた。

一之瀬があたしの事をどう思つてるかなんて考えもしなかつた。

氣味悪がらないでね。

もう貴方しか頼る相手がいないの。

### 3 これは恋かしら

一之瀬は5限が終わつたら6限は受けとて教室に戻つていった。

なんだか少しだけ気分がすつきりした。話しかけて良かつた。  
もういいや、6限なんて出なくても。

#### 3 これは恋かしら

結局6限もさぼつてHRだけ参加して今日の学校は終了。皆がさつさと帰つていく中に混じつて、あたしもさつさと学校を出た。  
1人で帰つていると、少し前の方に見慣れた後姿。今日話したんだから間違いない、あれば一之瀬だ。

話しかけていいのか迷つたけど、向こうも1人で歩いてるんだから別に話しかけてもいいよね。

そう思つて、普段学校では出さないような大きな声を一之瀬に向けて放つた。

「いーちのせ」

「あれ、倉田さん」

一之瀬が気付いて、こつちに振り向く。それに手を振つて、あたしは一之瀬の所に少し早歩きで向かつた。その光景を何人かのクラスの奴らに見られたけど別にいいや。見られて悪い場面でもないし。

一之瀬は当たり障りない会話を投げかけてくる。昨日のテレビとか、欲しい服があるとか。でもあたしが会話をし出したら自分の話を中断して、聞く姿勢に入ってくれる。

多分この姿勢は家族の人に精神疾患の人がいるから培われたんだろうな。そう思いながら、その好意に甘えて自分が話したい事をいっぱい話した。

友達がいないから、こんな話せる人他にいなかつたから、なんだか嬉しくて楽しかつた。

ある程度、話したい事を話し終え、あたしは少し気になつた事を一之瀬に聞いた。

「一之瀬、今日はおばさんの迎えに行くの？」

「いやーあれは時々だから。いつもは親父が仕事帰りに迎えに行くんだよ。それにお袋が病院行くのは大体朝だから、こないだは特殊なケース」

「ふーん……」

なんだか少しだけ一之瀬が話したくなさそうだつたから、この話はこれでお終い。また自分の趣味の話をし出したあたしを一之瀬は笑いながら聞いてくれた。

一之瀬と別れて家に帰つても誰もいない。母さんはまだ仕事のはずだ。何だか今日は気分がいい。久し振りにあたしが何かを作ろうかな?冷蔵庫を開ければ、結構な食材が中にあつた。これは中々豪華なのが作れそうだ。

「これは幸が作ったの?」

「そう

適当にそう答えて母さんの分の皿も出す。

あたしが料理したのなんて多分片手で数えるくらいしかないはずだ。母さんもあたしが殊勝な事をしたことに驚いている。

でも特に会話が弾む事もなく、母さんは有難うだけ言つて服を着替えて手を洗つて席についた。

「美味しいわね。あんた料理上手いわね」

「別に普通じゃない。本見たら間違えるなんてないし」

「そう? でもなんで今日はこれを作ったの」

「これが好きだから」

それだけ答えれば、母さんは食べていた箸を置いた。

「そう、あんた肉じゃがが好きだったのね。意外に和食派ね」

「別にいいじゃん。好きなものは好きなの」

「他には? 何かないの?」

母さんに質問されて驚いた。そんな事聞かれるなんて思つてなかつたから。

口ごもつたあたしに母さんはずっと待つてくれた。でも上手く答えることなんてできなかつた。

「和食なら何でも好き。でも洋食も好きだけど……ええと……」

「あんた好き嫌いないんじゃない? ふふ」

「そ、 そ、 そ、 う、 か、 も、」

笑つた母さんを久しぶりに見て、何だか心が温かくなつた。

今日料理して良かつた。心からそう思えた。

この事を一之瀬に話そう。そう思つて次の日、あたしは学校に向かつた。

話す相手が一之瀬しかいないあたしからしたら、早く一之瀬と話しあくて仕方がない。

向こうは友達がいっぱいいるみたいだけど、でもあたしには一之瀬しかいない。申し訳ないけど付き合つてもらうしかないのだ。

昼休み、一之瀬がクラスに遊びに来た。願つてもないチャンスに一之瀬の所に駆け寄ると、クラスメイト達の視線があたしに向かう。一々あたしに気にしなくていいよ。あんたたちは自分の好きなことすればいいのに。教室の前にいたくなくて、一之瀬と人通りの少ない場所まで移動した。

「今日友達に倉田さんと付き合つてんのかつて聞かれたよ。一緒に帰つたから」

「はあ？」

何それ。一緒に帰つたら付き合つてたとか、どんだけなんだよ。そう思つて呆れた声が出たあたしに一之瀬は慌てて否定しといったから!と弁解してきた。

でも今話してるこの状況でも勘違いされるんじゃないかな。そんな事一之瀬が言うもんだから一之瀬は少なからずこの状況を快く思つてなつて事だけ理解できた。なんか少しだけショックだけど仕方ないよね……

「そーだ一之瀬、アド教えてよ」

「アド?」

「そうそう。学校でんま話せないからメール」

「それはいいけど」

思い切つてそう聞いてみれば、一之瀬は特に気にする事もなくアドレスを教えてくれた。

他人のアドレスなんて最低限しか入つてないケータイにも遂に役目が回ってきたようだ。

今まで放置気味だったけど、これからは肌身離さず持つておこう。

そう心に決めて有難うと叫びれば、一之瀬は顔を赤くして首を横に振った。

でも急に真面目な顔をして話しかけてきた。

「もう一人の倉田さんってどんな子？性格とか」

なんていきなりそんな事を……あんな奴どうだつていいじゃん。少しだけムカついて、眉をしかめたら、一之瀬は少しだけ慌てた表情を見せた。

「どうでもいいじゃん。かんけーない」

「ごめん」

「別に、じゃあね」

なんかむかつく。聞いてこないでよそんな事。今日の前にいるのはあたしなんだから、なんでもう一人の幸の事を聞いてくるのかマジで訳わかんない。

結局その後、一之瀬と話す事もなく、あたしは今日の学校を終えた。

「……送つてもいいものか……」

家の帰つてから、あたしは悩んでた。

一之瀬にメールを送つていいかどうか。だつて向こうからは来てないし、多分今はバイトの時間なのかもしないけど。いきなり切れて帰つてしまつて、今更メールとか少し送りづらい。でもあたしが贈らなくて一之瀬は送つてきてくれないかもしないし……あーどうしよう…

悩んだつて仕方ない!とにかくまずは謝つて何とかしようと、そう思

つてあたしは簡潔に用件だけを書いた。

『今日は何かごめん。少し感じ悪かつたなって思った

暫くして返事が返ってきた。

ケータイを横に置いてたので、すぐにあたしは画面を開いた。

そこには『気にしてないよ。俺こそごめん。今バイト終わつたんだ』と書かれていた。

これは返信していいのかな?でもすぐに返信したら引かれるかな?

10分くらい待つた方がいいのかな。でも早く返信したい!

とりあえずしばらく時間をおいて返信することにしたけど、こんなに時間の進みは遅かつたかな?

早くして!そう思いながら既に出来上がつてるメールを何度も読み返した。

誤字はないかとか、愛想無いと思われないかとか……色々不安だつたけど、でももういいや!

メールを送つて、今か今かと返信を待ちわびた。

酷く滑稽でしょ?

なんだかこれつて私が貴方に恋してるみたいじゃない。

## 4 少しは気にして

「あの、倉田さん……ちょっといいかな」

話しかけてきたのはサッカー部に所属している同じクラスの石原だつた。

明るくてクラスの人気者、そんな奴が浮いてるあたしに何の用なんだろう？そんな簡単な事は思わない。

だって顔を赤くした石原を見れば、何の要件かはすぐに見当がついたから。

### 4 あの日の彼

石原が話しかけてきた事にクラスの女子たちが一斉にヒソヒソと話しだす。

それを少し気まずそうにしながら石原は、あたしが話を聞いてくれるかと言つのを待っている。

まあ聞くだけなら、答えは決まってるんだけど。

そう思いながら、OKの返事をしたあたしに石原は嬉しそうに笑つた。その姿を見たら、何だか申し訳なくなってしまった。

石原と教室を出て、中庭まで移動する。

まだ朝のHRは始まってないけど、流石にこの時間から生徒がこの場所にいるわけではなく、がらんとした中庭にはあたしと石原しかいない。

この状況だったら、どんな声でも聞き逃す事はなさそうだ。

石原は赤くした顔を隠す事もせず、もじもじする事もなく、勢い良

く頭を下げる。

「俺、倉田さんの事が好きなんだ！俺と付き合ってくれ！」

勢いよく言われることなんてなかつたから、少し戸惑つてしまつた。早く断れ。そう頭の中で思つていてるのに、必死な表情をしている石原を断る事が出来なかつた。

だつて石原は幸が好きだつた小学校の頃の初恋の相手だつた吉井にそつくりだつたから。

吉井もサッカーのクラブに入つてて、クラスで人氣者、明るくてクラスの中心人物で、皆あいつの周りに集まつて……。気が弱い幸は話しかける事も出来なくて、いつも日記に吉井の事を書き綴つていた。

その数カ月後に幸は自殺を決意して、あたしが倉田幸にとつてかわつた。つまり幸にとつて吉井は今でも初恋の相手なのだ。

その吉井に雰囲気がそつくりな石原。そんな相手をあたしが振つてもいいのか、そう思つてしまつた。

そして出た言葉は今まで発した事のないものだつた。

「少し……時間くれない？」

石原は待つてゐつて言つてくれた。だから一生懸命考えて結論を出さなきやいけない。

何に？大体あたしは石原の事を好きなんかじゃない。答えが決まつてゐるのに何に結論を出そうとしてる？

なんであたしが倉田幸の事を気にかける？あいつとあたしは全くの別人じゃない。

そうだ、何も関係ない。あたしは石原に恋愛感情なんて抱いてない。

さつさと振っちゃえればいいんだ。

帰りのHRが終わって、石原はサッカー部の奴らとさつさと部活に行ってしまった。

アドレスも知らないあたしは直接話をつけなきゃいけないから、今はもう返事をするのは無理だろう。

……帰るわ。

そう思つて鞄に荷物を詰めてるあたしをクラスメイトの視線が襲う。石原に呼び出されたあたしの返事がどうにもこうにも気になるみたいだ。でもその事はどうやらクラスメイト達は知つてたみたいだった。

「やつぱり石原君、倉田さんに告つたらしいよ」

「え？ マジで！ あり得ない……なんで倉田なの？」

「つてか今回は倉田さん考えさせてつていいたらしいよ。赤井が言つてた」

「はあ！ ？ マジ？ じゃあ倉田も石原に気あるわけ？」

何もそんな本人に聞こえるように話さなくとも……

溜め息をついたあたしは鞄を肩にかけて教室を後にした。

やつぱり学校は氣まずい。あんなに堂々と人の恋愛事情を暴露されたらプライベートもなくはない。

あたしはどうつて事ないけど石原が可哀想。

帰りにグラウンドを少しだけ覗いてみた。まだサッカー部は練習が始まつて無くて、数人の生徒がグラウンドでリフティングをしてアップをしていた。

座れる所を探して腰かけて、少しだけ様子を見ていると、石原が体操服に着替えてグラウンドに入ってきた。

その瞬間、数人の生徒が石原の所に集つて、仲良く騒ぎ始める。

やつぱり石原はだしに行つても中心人物見たい。

楽しそうにバスを出し合つてゐる石原を眺めてると不思議な氣分になつてくる。

この暑い中、影のある所に移動しないで皆がボールを追いかてる。一生懸命になつてゐる姿がとても格好良く見えた。

これはモテる対象だな。そう思ひながらグラウンドを眺めていると、不意に肩をたたかれた。

「倉田さん、珍しいね。見学してゐるなんて」

「……委員長」

話しかけてきたのはクラスの委員長の藤田美紀だつた。  
委員長も体操服を着てゐるつて事は、もしかしたら部活かなんかな  
んだろうか。  
立ち上がりつとしたあたしを委員長は座らせてサッカー部を眺めて  
いる。

「もつと近くで見なよ。」  
「あんまり見えなくない?」

「別に……そんな長時間見るわけじゃないし」

「やうなの?でも倉田さんが見てくれたら石原きつと喜ぶと思つけ  
ど」

ああ、やつぱりあんたも知つてるんだ。本当に石原があたしの事を  
好きつてこと、皆が知つてゐみたいだね。

じゃあ委員長はなんでこんな事を?あたしをただ単にからかいたい  
だけ?

視線を下にずらせば、委員長の足元にはプラスチックの籠に入った  
大量のペットボトル。

中に水が入ってるのを見ると、かなり重しだけど……

あたしがそれを見るのを気付いた委員長が笑いながら籠を持ち上げた。

「あたしマネだからさ、見学にいい場所知ってるよ」

「重くない？」

「慣れっこ。マジ腕つ 節強いよあたし」

につこり笑つた顔からは悪意など微塵も感じ取れなかつた。  
少しだけ笑い返して視線を石原に戻すと、委員長は籠を地面に置いてその場に中腰になつた。

「あたしさー石原の幼馴染でさ、倉田さんの事、石原から相談受けたんだよね」

「え？」

「話した事ないけど可愛い子がいるんだ、って。倉田さんって聞いて納得だつたけど……まさか告るとは思わなかつた」

「……」

「でも倉田さんは見学にわざわざ来てる。少しは脈があるつて思つてもいいんだよね？」

「それは……」

「大丈夫、あいつは我慢強いから。ゆっくり考えてくれればいいよ」

なんでこの人は他人の石原にそこまで言えるんだろう。

幼馴染だから家族同然なのかもしね。ますます断りづらくなつちゃつたじやない。

あたしに挨拶をして委員長はサッカーチームの所に向かっていく。なんだかあたしがいるのが石原にばれそうで、あたしは逃げるようにして、その場を後にした。

帰りを一人で帰つていると、少し離れた所を一之瀬と一之瀬のおばさんが歩いてた。

一之瀬は買い物袋を持ちながらも、おばさんと楽しそうに会話をしている。

なんだ……一之瀬の家は何だかんだ上手く言つてるんだ。良かつた……心からそう思えた。だって一之瀬は友達だし。友達？友達なのかな……そう言えばあたしたちの関係つて何だろ？あたしが一方的に迫つてるだけで、向こうは友達つて思つてないかも知れない。だつてあたしは一之瀬の告白もひつひつと振った訳だし。

何だか気分悪くなつてきた。早く帰ろう……

「昨日、おばさんと歩いてたじやん。見たよ」

次の日、登校中の一之瀬を見つけて話しかけたら、一之瀬は少し気が恥ずかしそうにしていた。

見られたかって言つて笑う一之瀬が何だか可愛らしく感じた。

一之瀬は家族思いだ。多分あたしが今まで知りあつた同じ年の人の中で一番家族思いだと思う。

そんな一之瀬が幸せそうに笑うのはいい事だ。きっとこんな風に笑つてくれるんだから、あたしの事だつてきっと嫌つてはないはず。勝手にそう思い込んで、そのまま一緒に登校した。

「あれ？倉田さんつて石原と付き合つだしたんじゃないの？あれ誰？」

「確かあいつ3組の奴だよな。あの噂『ママなのか？』

急に耳に入つてきた声に睨み返せば、そいつらは顔を背け速足で去

つていいく。

何? 何でこなこと言われなきやいけないの? そもそも石原とはまだ付き合っていないし、なんで一緒に登校してるだけで一之瀬と付き合ってるって事になる訳?

今の声は一之瀬にも聞こえてたらしく、少し困った顔をしていた。完全にあたしが巻き込んでしまったって感じだ。一之瀬は何も悪くないのに……

とりあえず、この場を何とかするために、あたしは敢えて大げさにリアクションを取った。

「マジでウッザ! 何であたしの行動がこんなに広がらなきやいけない訳?」

「しようがねえよ、倉田さんと石原が付き合つて噂すっげー広がつてるから」

「は?」

一之瀬の返事に目が丸くなつた。

一之瀬もこの噂知つてたんだ。多分石原が流してるんじゃないんだろうけど、じやあ誰が? 委員長? でも委員長もそんな事する様なタイプじゃないし……

そんな事どうでもいい。いつのまにけき合つてるって話になつた。なんでそんな話が大きくなつてるの?

それになんて一之瀬は普通な顔してあつやり言つてきた訳?

あんた仮にもあたしが好きで告白までしてきて、あれからまだ数週間しか経つてない。あんたにとつてあたしはその程度だったって事? なんかムカムカする。

「何それ、訳わかんない」

「でも倉田さんは告白をバツサリつて言つて有名だから、考えさせてはす」  
「進歩なんだよ」

セイジやなくて！あたしが聞きたいのはそれじゃない！！

「……あなたは嫌じゃないの？」

「え、俺？」

「仮にもあんたあたしに告白してきたじやん。なのにこんな尊立て嫌と思わないの？」

固まつてしまつた一之瀬。セイジで言葉が出ないって事はセイジことだよね。

はいはい分かりましたよ。あんたにとつてあたしはその程度ね。よく分かりました。

「倉田さん

「うつせい。ばか一之瀬」

何か言いかけた一之瀬を一喝して、先に学校に向かつ。

一之瀬のくせに！一之瀬のくせに！一之瀬のくせに……セイジ思いながら歩いていつて、ふと我に返つた。

あれ？あたしが起つて權利つてなくない？なんであたしが怒つてるの？

だつてあたしは一之瀬の告白を振つたんだし。なのに今、何も反応を返さなかつた一之瀬になんで切れてる？

あたしは嫉妬してほしかつたとでも言つんだろうか。

もうわからん！ただでさえあたしは頭いかれてるんだから、心までグジャグジャにしないでよ……

助けてよ。

あたしが助けを求めてるのは他の誰でもない、あんたなのに。

## 5 探りを入れて

結局あの日以来一之瀬と会話をする事なく1週間が過ぎた。石原の件も未だに解決していないあたしにとって、毎日の学校は苦痛でしかなかった。

### 5 探りを入れて

告白されてから、石原と良く話す様になつた。と言つても、向こうから話しかけてくるからそれに答えるだけなんだけど。

石原はやっぱいい奴だった。友達としたら間違いなくいい奴に入るだろう。

明るくて面白い。他人の悪口の言わないし、友達が行つた悪口に同調する事もない。

根っからのいい人キャラなんだろうな。そう思いながら石原の話を適当に相槌を打ちながら聞いている。

「マジ今度練習試合でさー俺スタメンなんだよね！」

「すじいじやん」

「まあ先輩が抜けたから2年の俺たち中心になつたからだけね。今年こそは絶対に都大まで行つてやるんだ！」

そう言つて意気込んで笑う石原につられて笑みが漏れる。

藤田さんが言つた通り、石原はずいぶん我慢強いタイプらしい。未だに告白の返事をしないあたしにこうやって話しかけてくれるし、急かすなんて事しない。

それに甘えてるだけなのかもしれない。他の女子たちがあたしの方

を見て、ヒソヒソと話をしている。

まああたしの悪口なんだろうけど、もつ慣れっこ。そつまつの気にしてたら学校なんてとうに行けなくなってる。

減る休みも終わりに近づいていく。あ、今日も確かに限つて社会だつたつけ?面倒くさいな。またさぼりつかな……

そう思つて、席を立ちあがつたあたしに石原は視線を送る。

「倉田さん?」

「ちょっと気分悪いから保健室行つてくれる」

「大丈夫?」

「うん。『めん』

心配してくれてるのに嘘ついて『めんね。本当はさぼりたいだけなんだけどね……

そう心の中でじちじで、クラスを出る。

この時間に屋上に行く人間なんて少ないだろう。階段を下つていくる人は見るけど、昇つていくる人はあたし以外いない。

屋上の扉を開けて外に出れば解放感。そのままフェンス近くの鉄格子に腕を乗せて、景色を眺めた。

別に景色がいいってわけじゃないけど、それでも屋上から見る景色がなぜか好き。

生徒たちがどんどん屋上を出ていく中、不意に聞こえた声に耳をすませた。

「春哉ー?」

「わりい雅氏先行つてて

「はあ?」

この声は一之瀬……下の名前春哉つて言つんだ。ここで昼飯食べてたんだね。

」の間も屋上で一之瀬と会つたし、一之瀬は屋上でよく昼休みを過ごしてゐみたいだ。

一之瀬がそのまま地面に腰掛けるのが分かる。その音を一つ一つ拾い集めてる自分も少しだけ滑稽だ。

振りかえつてジッと見ても、会話をする事はない。むしろなんだか気まずい雰囲気が包み込んでいく感じがある。

でもそう思つたのは一之瀬も同じだつたようで、困つたように眉を下げた。

「迷惑なら出てくけど」

「別に。いいんじやない？居ても」「どうせ」

何だか一之瀬に視線を向けれなくて、体を反転させて景色を見る。

一之瀬もそれ以上語る事もなく、黙つてている。  
一刻一刻と時間だけが過ぎていき、会話しない時間が何分過ぎた頃だ  
ら、あたしは勇氣を出して一之瀬に話しかけることにした。

「一之瀬つてや……誰かと付き合つたことある？」

一之瀬の顔を見ないで聞いたから、一之瀬がどんな表情をしていたのかはあたしにはわからない。

でも少しく「えつ」とか「あ……」とか言つてるから多分困つて  
るんだねつて事だけは分かつた。

しばらくすれば答える気になつたのか、息を吸い込む音が聞こえた。

「あるよ。中学の時に2人、長く続かなかつたけど」

やつぱり一之瀬は彼女いた事あるんだね。まあ一之瀬はいい奴だし、予想してた通りだけど……直で言わると何だか胸が痛んだ。

それを悟られないように質問攻めをする。

「どれくらい続いた?」

「1人は半年、もう1人は3カ月。短いっしょ?」

「どこまで行つた?」

「どこまでつて……キスまでは行つた

「……そつか」

普通の恋人してたんだ。羨ましい……あたしだつてそう言いつのじてみたいよ。

いや、頑なに逃げてただけかもしない。しようと思えばする機会はいくらでもあつた。現に今だつて石原の告白を〇くすれば、憧れてたその未来を迎える事が出来るんだろう。

でもそれをしないのは……あたしが石原を未だに恋愛的に好きにはなれないから。そして断れないのは……

「石原つてさ……幸が如何にも好きそつな奴なんだよね  
「幸つて……もう一人の倉田さん?」

全てを話してゐ一之瀬はすぐに理解してくれて助かる。やつぱり相談役がいるつていいことだな。

「小学生の時にさ、幸が初めて好きになつた奴が石原そつくりだつたんだよね。スポーツマンで明るくてクラスの中心で、幸はあいつといふと楽しそうだつた」

「うん」

「もしかしたらあいつと付き合つたら幸は起きのかなーつて思つてさ。そしたら速攻で断る事が出来なかつたんだよね。気づいたらいつまでもズルズル引き延ばして期待させて……最低な奴だね。あたし」

「倉田さんは……石原が好きじゃないのか？」

「わからない。付き合ってみたら好きになるかもね。告白されてから話すようになったけど、いい奴だと思う」

「だったら……」「でも向こうがあたしを受け入れてくれないと思う

そうだ、あたしが例え他人を好きになつたって、他人があたしを嫌つていく。

二重人格つて事を一生隠し通せる自信なんてあたしにはない。誰かに助けてほしくて、結局隠し通す事なく相手に縋りついてしまう。その結果、相手はあたしから離れていく。もうそれは実証済みだからきつと石原もそうだ。

あたしが放った言葉に疑問を持ったのか、一之瀬が焦つたようにして反論してきた。

「受け入れてくれないって……向こうが好きだから告白してきただろ？」「

「……二重人格だつて知つたら気味悪がられそうじやん」「それは……」

「中学生の頃、初めて好きな人が出来て付き合つた事があつたんだよね。でも二重人格だつて事を言つた途端ふられた。次の日にはクラス中に氣味悪がられた。それ以来かな、誰とも付き合いたくないつて思つたの」

今思い出して「ぐくショックだつたよなあ……向こうから告白してきて、いつも優しくて、この人なら受け入れてくれるつて思つたのに、言つた瞬間さよならだつたんだから。

思い出しただけで涙が出そう。あの日以来、他人と付き合つとか絶対に嫌だつて感じた。

こんな思いするぐらいなら1人でいいやつて。そう思つてたはずなのに、やっぱり1人は寂しい。どうしようもなく寂しいよ。

一之瀬は話を聞いて、気まずそうにしながらも、結局あたしが何について悩んでるかを理解しているようだ。

嫌だよね。一之瀬は精神疾患の人とかかわってるから、その手の人の対応に慣れ過ぎてる。楽だけど、鋭いから嫌。

「倉田さんは付き合いたいんじゃないのか？石原と……」

「わからない。今は別に好きじゃないから……」「

「早く返事しねえと可哀そudsうだよ。石原もドキドキしてんだからさ」「わかつてゐよ」

一之瀬もそつやつて急かすんだ。別にそれに文句を付ける気はない。どう考えたってあたしが悪いのは明白だから。でもさ、やっぱあんたに言われるのは心苦しいわけよ。

「一之瀬」

「何？」

「……何でもない」

本当は何でもなくない。教えてよ、どうすればいいのか。道を示してよ。

あたしの全てを知つてるのはあんただけなんだから、あんたしか頼る人がいないんだから、あたしを助けてよ。

ねえ助けて。

他人を信じるのは怖いけど、一人はもっと怖くて寂しいの。

## 6 できれば受け入れてください

「幸ちゃん、明日はお母さんを連れておいで」

いつも通つてる精神科の後藤先生からの電話に思わず一瞬息をのんだ。

母さんに話してもいいんだろうか。それだけが頭の中を占めていた。

### 6 できれば受け入れてください

仕事から帰つてきた母さんに話しかけるタイミングが見つからない。ただでさえあまり会話がないのに、病院と一緒に来いだなんて、そんなの簡単に言いだせるわけがない。

母さんが気になって橋があまり進まないあたしに、母さんは視線を送ってきた。

「どうしたの幸? どうか具合でも悪いの?」

「いや、そう言つ訳じゃ……」

「でも箸が全然進んでないじゃなー」

と言え、今しかない。

心の中でそう思つてゐるのに、中々口から言葉が出てくる事はない。何もしゃべらないあたしを不審に思つたのか、母さんが首をかしげた。待つて、まだ終わらないで。

言わなきやいけない事があるの。だから怒らないで聞いて。お願ひだから……

思わず箸をぎゅっと握りしめて、あたしは母さんに真っすぐ視線を

送った。

「今日、後藤先生から電話あった」

「後藤先生から…どうかしたの?」

「明日……診察に母さんを連れてきてほしいって……」

「え?」

案の定、母さんは目を丸くしている。

そりやそうだ。いきなりついて来いつて言われて了承できるわけがない。どうしよう、怒られたりしたら。

そんな考えばかりがグルグル頭の中を駆け巡り、上手く対応ができない。

暫く黙ってしまった母さんが怖くて、あたしは視線を外して顔を俯かせた。

「……明日は診察いつからかしら」

「17時」

「わかった。じゃあ16時30分には家に帰るよ」とするから一緒に

行きましょう

「行つて……くれるの?」

予想外だった。母さんはてっきり行つてくれないかと思つたから。ああでも行つてくれるか。良く考えたら母さんが病院に付き合つてくれるのは、一刻も早くもう一人の幸の目を覚まさせたいから。手伝える範囲を手伝うのはきっと当たり前なんだ。

早く母さんはあたしにこの世界からいなくなつて欲しいつて思つてゐにきまつてゐる。

そう考えたら、一気に気持ちが覚めて、あたしは礼だけを述べてご飯も食べずに席を後にした。

正直、明日が怖い。

先生が下手な事言つて母さんの機嫌が悪くなつたらどうしよう。そんな事ばっか考えてた。

「あのや、今日良かつたら練習見てくんないかな」

次の日の放課後、さつさと帰ろ!と思つてたあたしを石原が引きとめた。

石原からの告白を受けてもう一週間以上が経過する。なのに未だに返事をしないあたしを石原が咎める事はない。

あれ以来、石原と……特に藤田さんと話す様になつた。

藤田さんはいい人だつた。サバサバしてる性格みたいだから、余計な詮索もしてこないし、いつも明るくて楽しそうだったから。そして石原も……友達としてはすぐくいい奴だつて思う。でもまだ恋愛には意識はいかない。

こんなんだから早く振ればいいのに、振るのも怖い。最低な奴だあたしは……

「「ごめん、今田は予定があつて」

「あ……ちょっとでいいんだけど」

あたしも本当なら行つてあげたいけど、病院の時間まであまり余裕がない。

だからサッカーの練習を見てる暇がない。でもそんな事を言えるわけがなく、あたしはただ「ごめん」とだけ言つて、鞄を持って教室を出た。

後ろを振り向いて、石原の顔を見るのがすぐ怖かった。

家に帰つて驚いたのは既に母さんがいた事。てっきりギリギリまで帰つてこないと思ってたのに。

母さんはあたしに気付いて、読んでいた本を閉じた。

「早かつたわね。車で行つたらまだ余裕があるから少しのんびりしなさい」

「あ、うん。母さんこそ早かつたね」

「仕事がちょうどキリのいい所まで行つたからね」

母さんが笑つて冷凍庫を開けて何かを出してくる。

「ハーゲンダッツだ」

「あんた好きでしょ？ ドラッグストアで2割引きだつたから買つてきたの。食べなさい」

あたしが好きなの知つてたんだ……しかもストロベリー。

母さんに好きつて言つた事あつたつけ？でもそんな事どうでもよかつた。ただ母さんがあたしの事をちゃんと見ててくれた事が嬉しくて泣きそうになつたのを何とか堪えた。

なんだか少しだけアイスがしょっぱく感じた。

20分くらいのんびりして母さんと病院に向かつた。

後藤先生は優しくていい先生だから病院は相変わらず患者さんが必ず数人はいる。

予約してたから大して待つ事はなかつた。医療事務の人にお名前を呼ばれて母さんと診察室に入る。

診察室にはカルテを眺めている先生がいて、あたしたちに気付いて席に座るよう促した。

「私、後藤と申します。幸ちゃんのお母さんでよろしいですか？」

「はい、幸の母です」

「実は今日は幸ちゃんとお母さんの日常的な事をお聞きしたいのですがよろしくですか?」

「はい」

なんだか……あたしが先生にちくつたような感じだ。空気が重い。先生はカルテを開いて、あたしの今までの記録を呼んでいる。

「(+)の間、幸ちゃんの検査をしたんですけど、最近は少し安定してみたんですね。お母さんはいつも幸ちゃんと同じ会話をなさっていますか?」

「会話、ですか……」

気まずそうにしている母さんに申し訳なさが出てくる。迷惑掛けたつて病院出た後嫌われそうだ。

なんで先生はいきなりこんな事を聞いてくるんだろう。あんまりじやない。

涙をこらえてるあたしに気付いてるのか知らないが、先生が話をし出した。

「幸ちゃんの好きなテレビはしゃべくりなんだよね。幸ちゃんは意外とお笑い番組が好きなんだよね」

にっこり笑つた先生にあたしは小むく頷いた。  
それを母さんがじつと見ていた。

「(+)飯は和食が好きで、特に肉じゃがが好きなんだよね。後はファッショング雑誌を読むのが好きで学校帰りのウィンドウショッピングが好きだったよね」

先生はあたしの事をどんどん話していく。なんだか何でも知つてるような感じだ。

でもあたしはいつも診察の時に先生と色々な話をする。あれだけ話してたらあたしの事も大分知られてそうだ。  
まだまだ先生のあたしの情報暴露は続く。

「最近は映画を見るのが好きって言つてたね。学校も友達が出来たつて言つてたし、それが安定して元なのかもね」

「幸……」

不意に母さんが咳いて顔を上げたら泣きそうな母さんの顔が視界に映つた。

「私……何も知らないわ。貴方が何が好きなのか、何が樂しいって思つてるのか……」

「かあ、さん……」

「何も知らない、知らない……」

そのまま泣きだした母さんに何でかあたしまで涙が流れた。

だって母さんはどうだつていいくて思つてるんじやない。母さんがいつだつて見つけるのはあたしじゃなくともう一人の幸で、あたしじやない。

なのに何で泣くの？期待させないでよ、もしかしたら愛されてるなんて錯覚を持つちゃうかもしれないじゃない。

泣いている母さんに先生は優しくほほ笑んだ。

「悲しがる必要はありませんよ。他人の私でさえ、幸ちゃんはここまで話してくれたんです。母親である貴方はすぐに私よりも幸ちゃんについて知る事が出来る」

「先生……」

「幸ひやんは思ひへて少しロサ懸こかじ優しこ子ですよ」

何だかちよつとけなされた? そつ思つたけど、先生の言葉は優しくて柔らかくて、心が温かくなつた。

先生の奥さんは幸せ者だ。こんな優しい田那さんがいて。

母さんは涙を流しながら、何度も何度も頷いた。先生が言つたかつた事が少しだけ分かつた。

お互いをもつと知りあつて。やつ言つたかつたんだら。

診察が終わつて母さんと一緒に帰る。

母さんは車を運転しながらポソリと咳いた。

「幸、あなたフランス料理つて好き? 3000円で食べれるお店を  
ここの間見つけたの?」

「母さん?」

「行つたらす!」へ美味しくてね、母さんが今一番好きな店なの。  
一緒に行かない?」

母さんはあたしに近づいてくれる。ならその返事は一つだ。

「行く」

「良かつたわ。銀座にあるから車を止めたら少し買い物しまじょつ。  
今プランタン銀座でセールしてゐるじゃない」

「……うん」

少しずつ近づきたい。

ねえ母さん、今はあたしを見ててくれるよね。幸じゃなくてあたしだ  
よね?

そう勝手に思えるだけで幸せだった。それだけであたしはきっと生  
きていく。そう思つた。

少しだけでいいの。  
あたしの事を幸つて認めて笑いかけてほしい。

## 7 貴方だけには嫌われたくないんです

その日は幸せだった。久し振りに母さんとこんなに話した気がした。フランス料理は美味しかったし、なんだか自分がこんなに幸せでいいのかが分からいくらいだった。

### 7 貴方にだけは嫌われたくないんです

朝目が覚めたら、母さんがおはようって言つて笑いかけてくれた。テーブルには今までパンだったのに、珍しくご飯やみそ汁が並べられていた。

「珍しいね、いつもパンなのに」

「たまにはこうこうのもいいかなって思ったのよ」

母さんはそう言つけど、これはきっとあたしに合わせてくれたものだ。

たまにはつて言つたけど、少なくとも数カ月は朝ご飯にパンは出なかつた。それが先生と話して次の火にこれだから絶対にあたしに合わせてくる。

やばい、これが幸せつてものなのかなあ。

そう思いながら食べた朝ご飯は何だか最近食べてた朝ご飯よりも美味しい気がした。

学校はいつも通りだった。

相変わらず石原はクラスの中心人物で、あたしは未だに告白の返事をしないで、もう2週間も経ってしまった。

クラスメイトだってもう石原とあたしの噂をあまりしなくなっている。

もうこの際、いやむやこしてやろうか。そう思つたけど、それはあまりにも石原に失礼だったから止めた。

早く返事をしなきや、でもこんなに待たせた挙句振るなんて物凄い嫌な奴じやない。あたしは。

でも仕方ない、全部自業自得だつたんだ。結局石原の事を恋愛面では好きになれない。それだけだった。

早く言わなきや、そういうのに中々話しかけるチャンスもなく、気付けば放課後になつていた。

石原はさつさとサッカー部の面子と部活に行つてしまつた。

話しかけようと思つたのにじつちを見向きもしない。なんで急にこんな風になつたんだろう。

考えても結論は出ないけど、必死にない頭を絞ついたら声をかけられた。

「倉田さん」

「あ、委員長……」

そこに立つっていたのは委員長だつた。委員長は神妙そうな顔で、少し話があるから時間あるかな?とあたしに言つてきた。

断る理由もなく、大人しくあたしは鞄を持って委員長の後をついていった。

委員長に連れてこられた場所は、前に委員長がサッカーを見学するいい場所があると言つていたところだつた。

そこに腰かけた委員長を見て、あたしも隣に腰かける。

「倉田さん、あたしがこんな事言える義理じゃないけど……早く石原に返事をしてやつて」

「え？」「

思いがけない言葉に目が丸くなつた。でも委員長は辛そうな顔をしている。

「石原最近調子良くないんだよ。なんでかつて考へても倉田さんしかあたしには思ひ当たらぬ。付き合つ氣がないんならバツサリ振つてやるのも優しさだよ」

「委員長……」

「せんに真剣に悩んであげるのはすゝめことだと想ひ乍ら、流石に2週間は長過ぎるよ。待つてゐる石原の事も考へてあげて」

その言葉に頭を殴られた感覚がした。

あたしはずつと自分に甘えてた。石原に悪いつて思ひながらも、石原なら待つてくれる。そう思い込んでた。

こんなに待たされていいはずがない。石原はきつと怒つてる。そんな石原に更に振るなんて事できるのかな……

知らず知らずの内に泣きそつこなつてたらしい、そんなあたしを委員長は笑つて励ました。

「そんな顔する必要無いよ。倉田さんは一生懸命考へてあげたんだから。もしそれであいつが怒つたらあたしがぶつ飛ばしてあげる」

そういつて笑つた委員長がマジで頼もしく見えた。

「関係無くないし。俺は5組の奴に嫌われてるんだよ」

「は、何で？」

「こつまで経つても倉田さんが石原に返事をしないから、倉田さん

と仲がいい俺が倉田さんを盗つたんだってわ

「はあ？ 何それアホくさい」

「確かにアホくさいけど、実際陰口言われりや頭にくるわよ。倉田さんはいつまで経つても返事しないわ」

「……それは」

「それはじやないだろ。倉田さんがはつきりさせないのが悪いんだろ？ 迷惑なんだよ」

悪い事つて続くんだな。本当にそう思つた。

委員長と別れて、色々考えながら帰つてくると、田の前に一之瀬の姿を見つけて話しかけた。

でも一之瀬は何だか機嫌が悪くて、石原の返事を早くしりつて言われたから少し頭にきた。

あたしだつて悩んでるのに何で一之瀬にこんなに嫌味っぽく言われなきやならないんだわ。そう思つていつもの癖で言い返してしまつたら、一之瀬も言い返してきた。

そして最後には迷惑つて言われた。一之瀬はそのまま自転車をいこであたしの前からいなくなつてしまつた。

残されたあたしはその場に立ち尽くしたまま。

やばい、変な人じやんこれ。早く帰らなきや。

そう思つても足が縫いつけられた様になつて思うように歩けない。お願い、早く歩いて。だつてあたし今……凄く酷い顔してると思つ。だってこんなに胸が痛くなつたのなんていつ振りだろ？ とにかく早く帰らなきや、この顔じや外歩けない。

頑張つて家に帰つて自分の部屋に入つた途端、力が抜けて尻もちをついた。

息をするのも苦しくて、目の前がチカチカして、胸がズキズキ痛ん

で、顔に熱が集中して……ああこの現象を知ってる。

何度も経験してきた現象、それが今起るのうとしてる。

耐えようと思つても耐えれない胸の痛みに目から水滴が落ちれば、もう耐えられなかつた。

「う、うう……うええええ！」

そのまま声を上げて泣いたら余計に涙は止まらなくなつた。

なんであたしが嫌われなきやいけないんだう、ああ一之瀬はもうあたしに愛想を尽かしたんだ。

それが悲しい、もう話せないんだと思つたら悲しい。

なんでだろう。今まで嫌われる事なんて何度もあつたのに、なんでこんなに胸が痛いのか。石原に嫌われたらこんなに泣くほど悲しいのか……

それを考えたら何で悲しいのかなんて理由はすぐに分かつた。

惹かれてた。一之瀬に間違ひなく惹かれてた。

話を聞いてくれる時の表情が好きだつた。母親を心配する田の優しさが好きだつた。話しかけて振り向いてくれた時の笑顔が好きだつた。

でも気付きのが遅すぎた。もう一之瀬はあたしの事を嫌つてる。全部自分が招いた事だ。一之瀬にも石原にも迷惑をかけてしまつた。嫌われて当然だ、なのに……何でこんなに悲しいんだう。

「うえ……『めん、』『めんなさい』……」

それはどつちに謝つてるんだう、でも声に出さずこまいられなかつた。

好きになつてしまつて『めんなさい』。振つてしまつて『めんなさい』。

返事をしなくてごめんなさい。

友達でいてほしい、嫌われたくない。好きでいてほしい。  
お願いだから、もう一度あたしに振り返って笑ってよ。

分かってるよ、全部私が悪いって。

でもどこかでまだ貴方が笑いかけてくれるって期待してる。

## 8 彼の答え

もう決めた。一之瀬に怒られて全部分かつた。

あたしは彼に惹かれてた。あたしの事を理解して、それでもあたしの事を優先してくれる彼にどうしようもなく惹かれてた。  
もしかしたら石原も、あたしの精神疾患の話を聞いても見捨てないかもしない。

でもそれでも手を差し伸べてくれた、あの人がどうしても欲しい。  
きっとこれが最後の恋愛になつたとしても欲しかつた。

### 8 彼の答え

「やつぱ駄目、だつたんだよな……」

そう言つて悲しそうに顔を伏せた石原に胸が痛んだ。  
次の日、学校に言つたあたしは机に鞄を置いてすぐ、石原に声をかけた。

あたしから声をかける事なんて滅多に無かつたから、石原は顔を赤くして驚いていた。そしてそれが申し訳なかつた。  
自分から話しかけるのに、それが振る時だなんて。

石原を呼び出して人の少ない所で返事をした。貴方とは付き合えな  
いつて。

石原は傷ついた表情を浮かべながらも、どこかしら諦めたような表情をしていた。もしかしたらもう分かつたのかもしない。  
ズルズル返事を長引かせてたあたしに、なんて言つて振るんだろう  
と考えてると思われたのかもしない。

改めて自分の石原にしてしまつた行いの最低さを身に持つて実感し

た。

頭を下げるなら謝らなくていいって言われて顔を上げた先には、やはり悲しそうな石原の姿があった。

「最後に教えてくんね？」

「何を？」

「俺が駄目な理由。ただ単に俺がタイプじゃなかつた？それとも他に好きな奴いる？」

石原は多分気付いてる。だから聞いてきたんだろう。そしてそれを聞いて完全にあたしを諦める。

石原に酷い事をした分、正直に答えたい。

「……好きな人がいる。どうしてもその人意外は考えられない」

「そつか……頑張つて。応援するよ」

そう言って笑つた石原はやつぱり一般の類で言われる格好いいの分類に入る。

しかもこんな性格のいい人に好かれて、あたしは幸せ者すぎる。こんなに性格ひん曲がってるのに……

そのまま踵を返して歩いていく石原を見ていれば振りかえつて声をかけられた。

「帰んねえの？授業始まるよ」

「……一緒に帰つたら迷惑だから」

「何だよ今更。友達なんだから気にする事ねえって」

「……あんたどこまでいい人？あたしを友達つて言ってくれんの？なんだか泣きそうになつた顔を見られたくないくて、あたしはただ黙つて石原の元に足を動かした。

2人で一緒に教室に戻つて、そのまま授業を受ける。でも全然集中できなくて、意識は一之瀬に向かうばかり。

やっぱり今日中に何とかしなきゃいけない。

そう思つたあたしは授業中にもかかわらず、じつそりメールを打つて一之瀬に送信した。

どうか一之瀬がケータイをマナーにし忘れていませんように。没収されたら申し訳なさすぎる！

でも10分後に返信が帰つてきて、それが杞憂に終わったことに安心した。

“いいよ”

短いメールに少しだけ怖くなつたけど、でも今日全部決着をつけたいんだ。

早く放課後になればいい。いや、ならないでほしい。  
矛盾した気持ちを持ちながら、あたしはただただ授業の内容をノートに書き込んだ。

やつとHRが終わつた。何で今日に限つてあの先生は話が長いんだろ？

急いで一之瀬のクラスにいかないと。下手したらかなり待つてるかもしれない。

教室を出る前に石原の方をちらりと見たら、石原はクラスメイト達と笑いながら会話をしていた。その姿を見て、少しだけ安心した。

急いで一之瀬のクラスに行つたけど、案の定早くHRが終わつていたらしくて、教室には一之瀬しか残つて無かつた。

自分の席で無表情でケータイをいじる一之瀬は、どこか機嫌が悪い

ようを感じた。

それに少し怯えながらも、勇気を出して、あたしはクラスの扉に手をかけた。

「……ごめん、遅くなつて」

「あ、いや平氣だけど」

あたしが話しかけたら一之瀬は視線を向けてケータイを閉じた。いつもなら一之瀬が何か話を振ってくれるのに、何も喋ってくれない。痛いくらいの沈黙が襲いかかる。

でもあたしから呼び出した。あたしが話さないといけないんだ。あたしは思い切つて、石原を振った事を一之瀬に打ち明けた。

「さつさ、さ……石原に返事してきたんだよね

「へえ……そう」

一之瀬の無愛想な声が怖くて、少しだけ肩がはねた。一之瀬は間違いないなく今の状況を快く思つてない。

そうだ、だつて一之瀬は昨日あたしに怒つてきたから。

迷惑な奴に今更話しかけられたくないだろ？ でも聞いて、少しだけでいいから。

「あ、あのさ、結局付き合わなかつたんだ。友達としてはいい奴だけど、恋愛的にはやっぱ好きになれなくつてさ……」「え？」

今度の反応は違つた。完全に驚いた反応だつた。

これで1つ目の報告はできた。後もう1つの報告……あたしを嫌わないで。そう言いたいのに上手く言いだせない。

顔に熱が集まつていつて、自分で恥ずかしいくらい真っ赤になつ

てると思つ。でも田だけは逸らしたくなかったから、一之瀬の田を見つめた。

一之瀬がどんな表情をしてるかは逆光で良く見えない。でも顔の角度からして逸らしてなつて事は分かる。あたしはそのままボソボソと語りかけた。

「今更言える立場じゃなければ、や……石原は多分もつ一之瀬にキレたりしないと呪つからせ、もつ怒らないことよ」

「……」

お願い、何か言つてよ。無言とかあり得ないんだけど。何か言つてくれないと……あたし……

「」、今度はちやんとハッキリするから怒りなことよ……

その言葉と共に零れたのは涙。みつともないくらいうが情けないものに変わつてしまき、代わりに出てきたのは嗚咽だけ。でもその時、黙つて座つていた一之瀬が急に立ち上がつた。驚いて固まつてしまつたあたしに一之瀬はガバッと勢い良く頭を下げてくる。

「じめん……そんなんじゃなくて……なくて……俺も調子に乗つてたんだ」

「一之瀬？」

何言つてんの？調子に乗つてたのはあたしで、一之瀬は被害者なのに。

一之瀬が謝る事なんて一つもないのに……

「倉田さんが話しかける男子は俺しかいなつて調子乗つてた。自

分が特別なんだって優越感に浸つてた。だから石原と仲良くなつてく倉田さんに苛々した

「……」

「「めん、俺最低だよ」

最低じやないよ。その言葉だけで、あたしは期待してしまつたから。まだ自分は特別なんだって思つてしまいそうだから。

無意識のうちに首を振り、一之瀬の行った事を否定する。

一之瀬が顔を上げて、今度こそハツキリ目が合つた感覚がした。また泣きそうになつて、鼻をすすりながら、思った事を口にした。

「あ、あたし初めてだつたよ。家族以外にキレられて悲しくなつたの……」

「うん……」

「でも悪いのはあたしで、一之瀬はもつあたしの事嫌いになつたんだなつて思つて……」

その言葉が言い終わる前に視界が一之瀬の髪の毛しか見えなくなつた。

ぎゅうぎゅうに抱きしめられて、一之瀬はあたしの肩に頭を埋めている。今の状況を冷静になつて考えた途端、一気に顔が赤くなつて固まつてしまつたけど、どうにか体を動かして一之瀬の顔を見つめた。

一之瀬は辛そうな、泣きそうな顔をしてる。

「「めん倉田さん、俺まだ倉田さんの事好きだ。嫌なら突き飛ばしてくれればいい。」めん、友達つて言つてたのに結局俺はこんな奴だつたんだよ」

嫌だなんて一言も言つてない。そんな事思つはずがない。

嬉しそうすぎて何も言えなかつた。今の顔を見られるのが恥ずかしくて、一之瀬の肩に頭を埋めて、図々しいかな?つて思いながらも背中に手をまわした。

男の子つてこんなに大きいんだな。抱きしめられたのなんて初めてだから知らなかつた。

一之瀬の心臓もあたしの心臓も破裂しそうなくらい動いてる。もつといつそのまま破裂したら、きっと幸せにあたしは死ねる気がする。でも今死んでる場合じやない。死ぬほど嬉しいこの状況を逃すほど、あたしは馬鹿じやない。

「い、一之瀬がいいつて言つなら、あたしと……ひ、付き合つて下  
れ……い」

情けないくらい掠れた声が教室内に響いて、恥ずかしそうに死にたくなつた。

でもその直後、更に強い力で抱きしめられて、小さく「お願いしま  
す」と聞こえた。

その後、一之瀬の小さな笑い声が聞こえて、夢じやないんだって実感して、嬉しくてあたしも笑つた。

生を受けてから、ずっと……ずっと恋愛に憧れてた。  
わざと今なら嬉しかだけで死ねる。わざといた。

## 9 少しは恋人らしく

「そっか、あこつと付き合ひついこになつたのか  
「うそ……」

報告したあたしに対する石原の態度はやっぱり優しくて温かいものだつた。  
その優しさに甘え続けてた自分に罪悪感が再びのしかかつた。

### 9 少しは恋人らしく

「おはよ  
「あ、おはよ、おはよ」

次の日、登校してゐる途中に藤田さんに声をかけられて一緒に登校することになつた。

藤田ちゃんと軽い会話をしながら登校してこると前方に一之瀬の姿を発見した。

声をかけるのは少し遠い距離だったので、あたしはそのまま藤田さんに視線を戻そうとした時、石原が一之瀬に手を上げて挨拶をしているのが見えた。

一之瀬は驚きながらもすぐに嬉しそうな表情に変つてこむ。  
本当にどこまでもいい奴なんだよ石原は。

一之瀬と付き合いだしたと言つても全く実感がわかない。  
でも気持ちは跳ねてドキドキしてるのは感じる。でもそれは不快な  
わけじやなくて心地いいものだった。

そのまま教室について藤田さんと別れて自分の席に着く。

今日一之瀬を誘つて一緒に帰ろうつかな？付き合つてゐるんだから何も可笑しい事はないんだし。

そう思つてゐるけど、改めて言うのも何だか氣恥しい。  
結局メールを送つたのは2限が終わつた後だった。

“全然いいよ！HR終わつたら迎え行く！”

すぐに帰つてきた返事に少し笑つてしまつた。  
でも断られなくて良かつた。これからはいつもやつて誘つていいくんだ、  
そう思える事が嬉しかつた。

なのに……

「なんか一や一やしててキモい」

「……相変わらず容赦ないね倉田さん」

あたしの好きになつた一之瀬はこんなキモい顔をしてただろ？  
頬をだらしなくさせて口は情けなく開きっぱなし。二口二口笑い  
続ける一之瀬にキモさを通り越して逆に恐怖が湧いてきた。  
あたしの言葉を聞いても一や一やさせれる一之瀬を置いて先に歩けば慌てて追いかけてくる。

そのまま隣に並んでも情けない顔はそのまま。

「……なんでわざからそんな顔なの？」

「え、これは地顔なんですけど」

「そんなキモくなかった」

「……俺1日にこんなにキモいキモい言われたの初めてだよ

ごめんね、でもキモいものはキモいだから仕方ないじゃない。  
格好いいとか嘘を付ける顔じゃないのは確かなんだから。

あたしの一言に今度は表情を青くさせている。分かりやすい一之瀬の態度に笑いそうになつた。

そのまま何気ない会話をして帰るのが楽しい。これが恋人なのかな？でも話してゐる内容は全く変わらない、でもこんなにも気分が高揚している。

そのまま歩いていつていると、交差点に出た。いつもならここを左に曲がるけど、今日はまっすぐ。

一之瀬と同じ方向に歩いたあたしに一之瀬は首をかしげている。

「あれ？ 倉田さん曲がんねえの？ 家あっちじやない？」

「今日は病院に行く日なの。何しても変わんないのに」

一之瀬はそれ以上何も聞いてこない。適当に相槌をしてすぐに話題を変えた。

本当にどこまで気がきくんだろうか。  
そう言う所がありがたくて嬉しいんだよな。言つてやる氣もないんだけどね。

そのまま他愛ない話をしていると、田の前をセーラー服と学ランの夏服を着ている高校生が歩いてきた。  
頃垂れている男子を女子が励ましてゐる感じだつた。

「あーもう駄目だ。もう俺死ぬ。勉強に稽古に両立できるわけが無い」

「拓也諦めないでよー。1とか取つたら夏休み補修だよ」

「澪はいいよ頭いいんだから。もう俺本格的に喋つてる間にも眠気が……」

「寝るなら家でね。こんなところで寝たら拓也見捨てて帰るか？」

「……夏なのに心が寒い。澪も冷たい……」

会話事態に大して興味はなかつたから余り聞いてはいなかつたけど、

一之瀬がなぜか2人を凝視している。

あの2人はそんなに面白い会話でもしてたのだろうか。見た目は普通の高校生だけど。

一之瀬があの2人に何を考えているのか大して興味もなく、そのまま前を向いて歩いていると、不意に一之瀬がポツリと呟いた。

「幸か

「は？」

今あたしの名前を呼んだ？

間抜けな返事が出て、あたしの声を聞いて一之瀬がいきなり慌てだした。

でもそれを見て何となくわかった。一之瀬がなんであの2人を凝視してたのかを。

なるほどねえ、ハッキリ言えばいいじゃない。

「一之瀬の名前って何だっけ？」

「え」

「知らないんだよね。一之瀬の下の名前」

「そ、そんな……告る際にちゃんと名乗つただろお」

「そん時は一之瀬の事どうでも良かつたからさ、どうでもいい事なんて覚えるわけ無いじゃん」

一之瀬に暗い影が見え始めて慌てて口を閉じたけどもう遅い。

完全に一之瀬はいじけてしまってる。流石にこれは酷過ぎだかな。でも知らないのは知らなかつたの。しょうがないの、いいじゃない。これからはずつとその名前で呼び続けるんだから。

「春哉、一之瀬春哉」

春哉、一之瀬春哉。それが一之瀬の名前。

春哉とか中々格好いい名前じゃない。一之瀬にはもつたいないよ。でもまあ名前を呼ぶんなら格好いい名前の方がいいから許してあげる。

でも中々名前を呼ぶ機会もなく、何気ない会話をしている内に病院に向かう曲がり角に到着した。

この先を曲がれば病院だ。一之瀬とも「」でお別れ。

「倉田さんあつちだら。じゃあまた明日な」

一之瀬はそう言って自転車を向かう方向に向ける。いつもならそのままあたしもばいばいつて言って別れるんだけど今日は違つ。まだ言つてないんだよね、あんたも言つてほしいんでしょ？

「そうだね、じゃあね春哉。また明日」

そう言つた瞬間、春哉の目が点になる。その間抜けすぎる顔に吹き出して笑つてしまつた。

「呼んで欲しかったんじゃないの？急に人の名前呼んできても」「え、いや、そのお……」

「正直に言ひなよ」

「……その通りです」

意外とあつさり認めたな。まあ人間素直なのが一番。

小さく縮こまつてしまつた春哉が何だか可愛くて笑つていたら、春哉がガバッと顔を上げた。

何か言いたそうにしてるけど、何を言いたいかは大体分かる。

「倉田や……」

「幸

「え？」

「あたしの名前。知つてるじやん」

嬉しそうにした後、急に緊張した面持ちになる。

そんなに緊張するものなのかな？名前なんて家族に呼ばれるじゃない。

一之瀬は『氣まぎれ』に、でも嬉しそうに笑つてあたしの名前を呼んだ。

「や、幸。また明日」

「はい、また明日春哉」

一之瀬は顔を赤くして帰らうとしたけど、そんな顔じゃ帰れないでしょ？

少し青ざめさせてあげようか。

「あ、そりそり。あんま他人を凝視しないほうがいいよ。変態みたいだから」

「へ？」

「随分羨ましそうにしてたけど」

「あのー倉田さん」

「幸つつつてんじやん。あたしは何も知らないよ。春哉が桜ヶ丘の生徒をすんごい羨ましそうな目で見てたなんてね」

一之瀬の顔が真っ青になつて行くのを視界に入れながら病院に向かつた。  
しばらくして振りかえるとそこには一之瀬の姿はなかつた。

一之瀬、違う。春哉。春哉、春哉、春哉……

「春哉……」

改めて呼ぶと恥ずかしくて、でも心が温かくなつた。

今日の事も先生に報告しよう。嬉しい事があつたんだよって。

他人の名前を呼ぶのに緊張するのは貴方だけ。  
わかる? それだけ特別なんだつて事が。

## 10 彼女としての初デビュー

「幸！今日は俺のバイト先を紹介するぜー！」  
「はあ？」

### 10 彼女としての初デビュー

春哉がいきなりなんの脈絡もなく言つてきたもんだから、ついにじつっていたケータイを落としてしまった。

それを春哉がすごい反射神経で地面に落ちる前にキャッチして笑つて返ってきて、それを受け取りながらも驚きはまだ隠せなかつた。

紹介する？バイト先を？なんで？

春哉のバイト先って結構お客の多いラーメン屋だつたはず。春哉と付き合う前だけど、あたしも1～2回行つたことあるから場所もわかるし、今更紹介するような場所でも……

まさか春哉が言つている意味は……

一つの結論にたどりついて、顔に熱が集まつてくる。  
それを悟られないようにしたつもりだけど、自分で呆れるくらい声がどもつてた。

「え、な、何で？何であたしが春哉のバイト先に？」  
「先輩が幸を見たいつてうるわしくてさあ、プリクラ見たら」

プリクラつてまさか……やつぱりあたしの思つた通りだつた！  
春哉はあたしをバイト先の人紹介するつもりだ！

「何で見せんの！？春哉馬鹿じゃないの！？やだ！絶対行かない！」

ハズすぞーーー！」

「そ、そこまで言わなくても……いいじゃんー俺だつて彼女誰かに紹介してえよーーー！」

やつぱりそつじやない！そんなのハズイに決まつてんじゃん！そつ語いたいのに、春哉の紹介したいって言葉に少しだけ嬉しさがこみあげてしまつて上手く言葉にできない。

口をパクパク金魚みたいにしてるあたしに、春哉は少しだけ困ったよつな顔をした。

「無理しなくていいよ。先輩にはつとへつか、急に『メン』

あ、え？

いきなりそう言われたら罪悪感が募る。春哉はあたしを彼女つて紹介したいだけじゃない。

そうだよね、学校の人じやないんだし……あたしだつて、その、公に春哉の彼女つてアピールしたい！

「行ける」

「へ？」

「春哉の彼女とつじやなくラーメン食べただけなんだかい。奢つてね」

「お、おうー奢つてやるー！チッピングにチャーシューつけ麺やるー。」「あたしチャーシュー麺だから卵チッピングで」

「あ、やつ……」

照れくさくてそつぽを向いたあたしの耳に春哉の嬉しそうな声が聞こえる。

一緒にラーメン屋行くだけなのに、こんなに喜んでもらえたらあたしが嬉しい。

春哉は学校終わつたら一緒に行こう！って意気込んで教室に戻つていつた。

あたしもその後をついて教室に戻つて、今か今かと学校が終わるのを待ちわびた。

「ここが俺のバイト先！さあ席についてついで！」

連れてこられたあたしはカウンターの席に座らされた。

春哉は着替えてくるつて行つて奥の部屋に引つ込んでしまい、何もすることのないあたしはケータイをいじりながらもメニューを見た。なんだ、紹介するつて言つても別に普通にラーメン食べてればいいみたい。メニューを聞いてきた人に答えると、その人もすぐひつこんでしまつたし。

面と向かつて彼女です！つて言つのかと思つてたから少し拍子抜け。でもバイト先の先輩らしき人があたしを見て、他のバイトの人には話しかけている。なんかやっぱ少しだけ気まずい。

春哉がバイトの服つて言つても黒いTシャツだけど、それを来て厨房に入つていくと、すかさず1人の先輩っぽい人が春哉にちよつかいを出しだした。

それに女人と男の人と、なぜかおじさんまでが混ざつていて。へえ……春哉つていじられ系な訳か。でも和気あいあいとしてて楽しそうじゃない。

店内はこんな時間だからか結構人が多い。まあサラリーマンが多いみたいだけど。

その時、店内のドアが開いて、3人の高校生が入ってきた。うち2人を見た事がある。あの子たちって確か会つた事あるよね。コンビニで。

短髪のスポーツバッグ背負つてた子があたしに気付いて、もう片方の子の肩を叩いている。

「なんだよ中谷」

「広瀬、あの人さー広瀬が体当たりしちゃつた人じゃない?」「体当たり!?」

「人聞き悪い言い方すんじゃねえよ!拓也も信じんなよ!でも確かにあの人だ。あの人可愛いよなー」

「お、何ですか?恋が始まりましたか?」

「うわー中谷うわー」

「なんでだよ!」

やつぱあの子はムードメーカーみたいだ。でも楽しそう。

あの時は2人しか見なかつたけど、いつも3人でいるんだね。3人の高校生は騒ぎながらもすこく楽しそうだ。

その3人を見ていると、春哉の先輩があたしに声をかけてきた。

「春ど~う~あいつちゃんと彼氏やつてる?」

いきなり聞かれて少し焦つてしまつた。

厨房の方を覗いてみると、騒いでる春哉と茶化してるバイトの人たち。

あーあ……春哉がそんなんだから、あたしまで茶化されんじゃないの?

「春?春哉の事ですか?どうですかねえ、春哉はヘタレですか?」

「あははー確かに」

確かにって事は春哉はどうに聞いてもヘタれなんだなあ。それもそれで情けないけど。

春哉の方をチラって見たら、春哉をおじさんと大学生くらいの男の人が抑え込んでいた。

ていうか仕事しなくていいのかな。

そんな事を考えていると、春哉がラーメンを持つてあたしの所に小走りでやってきた。

その様子を確認した先輩は春哉の肩を叩いて厨房に戻っていく。

春哉はなぜか少し息を切らしながら、あたしの前にラーメンを出してきた。

「はい、お待ちどうさん」

「マジ遅い。つてか卵ついてない」

「あ、ごめん」

「春哉、あたしが客だからって氣い抜いてんでしょう。ムカつくから店のアンケートに名指しで悪口書いてやる」

「止めてそれ！店長にマジで怒られるから！」

本気で嫌そだし可哀想だから、それは止めてあげよ。

春哉は慌ててラーメンを持つていつて、新しいラーメンに卵を入れようとしている。

それに必要ないからそのままいいと言えば、少しだけ安心したよう卵を入れて再び器を持ってきた。

困ったように笑つて差し出されたそれを食べると、やっぱり美味しかった。

春哉は他のお客にも出さなきゃいけないから、厨房の方に戻つて色々作業している。

そのままズルズル食べていれば、あたしが食べるのが遅いのか、お客様は少しづつ少なくなつていった。

時間を見つけた春哉があたしの隣の椅子に腰かけて話しかけてきた。

「ラーメンどう？」

「美味しい。先輩作るのうまいね」

「いや、それ俺が作ったのもある。トッピングの卵は俺製～」

「……わつきから可笑しい味があると思つてたら卵か」

「おいー！」

春哉は見事に突っ込んだ後、少し気まずそうにして、あたしに振り返つた。

「幸さー、優太さんに愛想良すぎじゃね？」

「はあ？ あたしが愛想悪かつたらあんたが氣まずいじゃん。空氣読んであげたんだよ」

「幸ありえねー！ ツンツンすぎる！ 少しは『テレを見せてくれ！』はあ？」

急に春哉がわめきだしたから、田が丸くなってしまった。  
声が結構大きかったから、周りの人もこっちに視線を向けてくるし、  
ハツキリ言って恥ずかしい。

何してんのこいつは。

でもそれと同時に何だか春哉が可愛く感じて笑つた。

「すいませーん！ ラーメン替え玉ー！」

「中谷お前よく食うなあ……」

その時、声が聞こえて振り返ると、3人組の高校生の1人が手を上げて大声で替え玉を注文している。

2人はそれに呆れてるけど、でもどこか楽しそうだ。

それにもあの子は本当に根つから元気な子なんだなあ……  
体だけ向けて他人事のように眺めている春哉を蹴飛ばして早く行け  
と促せば、焦つたように立ち上がった。

「ほら春哉、早く行きなよ」

「どんだけシンシンなんすか！しかも俺だけ！」

「これは春哉専用。これも立派な特別扱いじゃない？」

「……つくねー！」

悔しそうな顔をしてオーダー表を持って立ち上がった春哉に告げれば顔を赤くして立ち去ってしまった。

春哉がオーダーを受けて厨房に向かえば、3人組のスポーツ少年がこっちをじっと見て声を出した。

「あの人、彼氏いるんだなあー残念だつたな広瀬」

「何がだよーお前マジ馬鹿じゃん！聞こえるから止めろって」

いやもう聞こえますけど……でもあの子が言えば不思議と嫌な気分にはならなかつた。

本当に不思議な子。

この席からは厨房で仕事してる春哉が良く見える。  
それを見つめながらにやける口元を手で隠した。

仕方ないじゃない。

こうこうのが初めてで心底舞い上がってるんだから。

## 11 おはよ♪。だけ起きないで

「でもーこないだ2人でデートしてて  
「えーマジでー！？」

目の前を歩く女子高生2人が楽しそうに話をしている。  
デートをした事を嬉しそうに語つてころ方は、どうやら最近付き合  
いだしたらしい。

顔を真っ赤にしながらも嬉しそうに語る様子は誰から見ても幸せそ  
うで可愛らしかった。

11 おはよ♪。だけど起きないで

「でねーチューしちゃったー！」  
「マジでーー？やつたじやあんー！」

良くそんな事を大声で話せるな。

いや、恋バナをしてる様子は学校のクラスメイトの女子が話すよう  
な感じだから、多分嘘こいつなんだ。

あたしは恥ずかしいし、そんな事を話す相手も正直いないから、そ  
う思うだけであって、多分仲のいい友達がいたら、こんな風に彼氏  
の事を聞きとして語るものなんだろうな。

キスをしたと話す女子高生を見て、不意に自分はどうなのかと思つ  
た。

そりゃあたしまだ春哉とキスしていないな。いや、したくない訳  
じゃない。

もつと堂々と恋人らしくしたいつていつも思つてる。でもそれが出

来ないのも分かつてゐる。

最近もう1人のあたしについて考えるようになつた。  
もう1人の倉田幸はどうしてゐるんだろうか。いや、あたしが分から  
なかつたら誰も分からぬ。

この肉体は第1人格である倉田幸の物で、あたしが好き勝手に使つ  
ていいかと聞かれたら分からぬ。

前までそんな事、全然考えなかつた。倉田幸は鬱陶しい対象だつた。  
こいつのせいで、自分は普通ぢやないと思えるには十分すぎる素材  
だつたから。

でも今は違う。その理由は分かつてゐる。

先生に相談した時に、それは自分が今満たされてるからだと言われ  
た。

確かにそつかもしれない。

母さんと最近いっぱい話す。学校の事、春哉の事、自分自身の事。  
母さんはあたしの好物や好きなものを覚えてくれるようになつた。  
ときどき作ってくれるようになつた。

それがすごく嬉しかつた。

2人でファッショング雑誌を見て、今度一緒に買い物しようと言つて  
くれた。

楽しみでしようがなかつた。デートでもないのに、どんな服を着よ  
うか迷つたくらいだ。

学校では石原や藤田さんが話しかけてくれる。

石原は友達として本当にいい奴で、石原のおかげで藤田さんや石原  
の友達とも仲良くなつた。

今度皆でラウンドワンに行こうと誘われて嬉しかつた。  
少しづつ学校になじめてるつて感じた。

そして春哉がいてくれるから。

家族でもないのに、家族のように優しく触れて理解してくれる。

何事も優先させてくれる。怒らずに全部理解しようとしてくれる。

それが心地よくて安心できる。

全部春哉がいてくれたから。

今自分はすごく幸せだ。だからこそもう一人のあたしが気になるのだ、不幸な事しか体験せずに自らの殻に閉じこもってしまったもう1人のあたしを。

逃げた臆病者としか思えなかつたけど、今なら励まして上げれる気がする。

真つすぐ歩きながらぼんやりと考えていると、不意に意識が遠ざかっていく感覚に陥った。

まだ、最近よくある。

頑張つて真つすぐ歩こうと試みたけどできなかつた。

恐怖が体をよきり、そのままあたしは意識を手放した。

「つ……」

目が覚めた時に見えた物は見慣れた天井。ここはあたしの部屋だ。待つて、あたしはどうやって帰つた？確かにあの時意識がなくなつて自分でもどうやって帰つたか分からない。

なのに今自分はここにいる。

なぜ？どうして？

この感覚に覚えがある。でもそれは認めるには怖くて、急に心細く感じてきた。

お母さん……駄目、今は仕事中だ。春哉も……今はバイトのはず。

石原や藤田さんには相談できない。

ぐるぐる回る頭で必死に考えた末、でてきたのは後藤先生だった。

電話をしたあたしに先生はすぐに来てもいいと言つてくれた。

でもやっぱり、他の患者さんも待つてゐるから、あたしは看護師の人になだめられて先生が来るのをひたすら待つた。

15分後くらいに慌てた様子で先生がやってきた。

「『めんね幸ちゃん。今なら予約の患者がいないから少し時間がとれる。待たせてごめん、怖かつたね』

頭を撫でられてひどく安心した。今あたしは1人じゃない。次に予約の患者が来るまで先生は話を聞いてくれる。だからあんまり時間はとれない。

だけどわずかな休憩時間に話を聞いてくれる先生はやっぱりとても優しい。

あたしは自分に起こつたことをありのまま話した。記憶が飛ぶ事、今自分が幸せな事、そしてもう一人のあたしの事。

先生は親身になつて話を聞いてくれたあと、肩に手を置いた。

「先生？」

「幸ちゃん、驚かないで聞いてね。それは多分、もう1人の幸ちゃんが目を覚ましてるのかもしれない」

「え……」

驚きはしたものの、やっぱりそつだつたんだと言つ気持ちの方が大きかった。

だつてこの感覚は幼いころに散々会つた感覚だから。もう1人のあ

たしが起きた合図。

「今はまだあまり表に出ないのかもしない。でもわずかな時間表に出てる可能性が高い」

「な、何で急に……」

「それは多分幸ちゃんが今幸せだからだよ。幸ちゃんは前までもう1人の幸ちゃんなんて消えればいいって言っていた。それがもう1人の人格を縛り付けていた。だけど幸ちゃんは今、もう1人の幸ちゃんを心配できるほどの余裕を持っている。それがもう1人の幸ちゃんにとって、自分を認めてくれていると言つ事になるんだ。後は周りの環境だね。もう1人の幸ちゃんは今の環境なら幸せになれるつて思つてるのかもしれない」

幸が目を覚ます……そうしたらあたしはどうなるの？

やつと手に入れたのに……やつと今幸せなのに。幸はあたしから奪う気なの！？

握り締めた手が痛くて涙が出そうだった。

そんなあたしの頭を先生はゆっくりなでた。

「大丈夫だ幸ちゃん。ゆっくり解決してこいつ。時間はあるんだ」「もし幸が目を覚ましたらあたしは……」

「消えはしないよきっと。体を2人で共有することになるはずだ」

そんなの無理だよ。

そうなつたら好きな時に母さんと出かけられない。石原達と話しきれない。春哉と一緒にいられない。

いやだ、盗られるなんて絶対いやだ。

母さんや石原達もきっと盗られる。でも春哉だけは取られるのは耐えられない！

その時、看護師が予約の患者が来たと言いに来た。

先生は困っていたけど、明日来てくれと言つて予約を取つてくれた。  
それに頭を下げる診察室を出たけど、心は完全に上の空だった。

“おはよう。”そう言つてあげたかった。  
でもそれと同じくらいあんたに“おやすみ。”と言つてやりたい。

## 12 貴方の全ては手に入らないけれど

「あ、いやーや……なあ、その……キスしていい？」

春哉に言われた言葉に頭が真っ白になつた。  
わかつてゐるのだ、付き合つて1カ月経つてキスもしないのはおかしいって事くらい。  
でも今のあたしには勇気がない。

### 12 貴方の全ては手に入らないけれど

慌ててばぐらかしたら1カ月は遅いんじゃないのかと突つ込まれて何も言い返せない。

言葉を探してうつむいているあたしに春哉がどんな顔をしているかは分からぬ。

言つのが怖い、でも言わなきや春哉はきっと自分が嫌われてるつて勘違いしてしまつ。そんなんじやないのに……

言わなきや……言わなきや言わなきや言わなきや。

心中で何回も呪文のように唱えて自分を奮い立たせて、顔を上げて春哉の顔を見つめる。

「幸？」

「駄目、この身体は倉田幸のだから駄目。幸はまだ起きてない。フアーストキスが知らない間に取られてたら悲しいじゃん」

あからさまに落胆した春哉の表情に胸が痛んだ。

やつぱり春哉はあたしなんかじや駄目なんじやないだろ？ だつ

て、普通だつたらキスもできない彼女なんて彼女じゃない。

春哉もあたしを見捨ててしまふんじゃないのか。

そう考えれば恐ろしくて、零れそうな涙を溢さないよう必死だつた。でもその時、極めて明るい声を春哉が出してきた。

「まあショウガねえか。行こうぜ幸、ラーメン奢つてもよ

春哉は優しい、こんな時も気を遣つてくれる。

でも分かつて、あたしだつて春哉の事ちゃんと好きだから。

「春哉、ちゅーしょ

そつ言つて廊を窓に押し当てたあたしを見て、春哉は首をかしげた。廊下に立つている春哉と教室の中にいるあたし。窓を隔てたらキスできる。馬鹿馬鹿しいのは分かつてゐる。こんなのはただのおままでだつて事も分かつてゐる。

でもこんな事しかできないうから……

春哉は苦笑いしながら、あたしの真似をしてくれた。やつぱり春哉は優しい。

こんなおままごとみたいな事で満足してるのはあたしだけ。だけどそれには付合つてくれる。

ありがとう春哉、ごめんね。

あれから何度も記憶が飛ぶ時があつた。短い時は数分、長い時は数時間。

頻繁に起る時には1日数回、でもない時は数日1回程度の時もあつた。良く分からぬけど怖くて怖くて、先生しか相談できなかつた。

あれから春哉に特に変わった面は見られなかつた。

いつものように一緒に途中まで帰らうと言つてきて、時間があつたら少し話して別れる。

その生ぬるい感覚に浸つている時間がすゞく幸せで、春哉は自分を必要としてくれるのが分かつた。

だから言つべきだと思った。自分の事を、他の誰でもない春哉にお母さんには言えない。きつと表面では悲しんでくれるけど、それ以上に元の幸が戻る事を喜ぶはずだから。

でも春哉だけは……春哉だけはきつと悲しんでくれる。あたしを必要としてくれる。

春哉に話をするために、あたしは今日春哉のバイト先のラーメン屋に向かつた。

バイト先の先輩たちはいい人たちだつた。先輩達もあたしに慣れたのか、オーダーを聞きに来るついでに色々話しかけてくれた。

それに話をしながら春哉が来てくれるのを待つ。

そしてお客様に春哉のラーメンを出した春哉があたしの所に歩いてきた。

「あと1時間いていい? 一緒に帰ろうよ」

「え、いいけど」

「夜道は危ないからね、ボディーガード必要じやん」

「あ……ですよねー」

こんな可愛くない事を言つあたしにも春哉は笑いかけてくれる。それに素直に笑い返せないあたしは本当に可愛らしくない。

そのまま春哉をラーメン屋で待つ。

やっぱりここは人が多い。今時間はサラリーマンが多いみたいだけど。まあここはラーメン美味しいし、バイトの人も愛想がいいし、値段も手ごろだしね。

ケータイをいじつてゐるふりしてこつそりラーメンを作つてゐる春哉の写真を撮つた。真剣そうな顔がカッコイイと思つたから。

湯気が邪魔してはつきり映らなかつたけど、春哉の真剣な表情はしつかり写つていた。

それを保存して春哉が終わるのをひたすら待つ。

いつの間にかつるさくなつっていた心臓は普通に戻つていた。

暫くして春哉が制服に着替えて戻つてきた。

あたしはそれを確認してケータイを閉じる。ずっといじつてたせいか、電池はもう1になつていた。

「お疲れ」

「ごめん、暇そだつたな」

「まあね。ケータイいじつてたら電池無くなつた」

春哉が笑つて謝つてきて、それを受け流してラーメン代を支払つて店を出た。

外は蒸し暑くて、入り口のドアを開けた瞬間、生ぬるい風があたし達を包み込む。

春哉はバイクの時に使つてたタオルを首に巻いてチャリを動かしだした。その後ろに座つて、春哉の肩に手を置いた。

「春哉それおっさんみたい」

「うつせー。だつて暑いんだよ」

最近の日課は春哉を家の近所まで送つてくれる事。2人乗りしてるので自転車は中々スピードが速い。

その間にぽつぽつ会話しながらも春哉の自転車をこぐスピーデは変

わらない。

前2人乗りしてて警察に怒られた事もあつたなあ。あの時は2人で笑つてしまつた。怒られたねーって。

いつ言いだせばいいか分からなかつたけど、早く言わなきゃいけないと思つたあたしは別れる交差点に向かう前に声を出した。

「春哉、今日」のあと少し時間ある?」

「えー30分程度なら。一応2~1時には帰りたいからや」

「じゃあ30分どつか寄ろうよ」

「どこに?」

「近くの公園」

春哉はいいよと言つて、そつちの方面に自転車を動かした。そうやつて受け入れてくれる春哉が優しくて大好きで、肩に置いていた手を腰に持つていき、抱きつくように腕を春哉の腰にまわした。結構力が強かつたみたいで、春哉が笑いながら苦しいつて言つてる。でも話してやらない。

「幸、くすぐつてえつて。もうちょっと緩めてよ」

「ちょっとぐらうこ我慢しなよ」

はいはい。そう言つて春哉が自転車を走らす。そのまま黙つてたけど、不意に言つたくなつて再び春哉に声をかけた。

「春哉、ありがとね」

「んー?」

「あんたもあたしなんかじゃ不便じゃない? まあ」との様な恋人でさ

「何だよ。そんなん思つた事ねえよ」

「……そつか

思つた事ない？本当に？本当に思つた事ない？

それを信じていい？その言葉だけであたしはすぐ救われてゆつてわかつてる？

それぐらいきつとあたしは春哉に依存してゐる。それは言えないとどでも今度は春哉があたしに話しかけてきた。

「なあ幸」

「ん？」

「俺、少しは幸を満足させてる？」

「全然」

嘘、本当はあたしにはもつたいないくらいの人つて思つてゐる。満足なんて言葉じゃ言い表せない。でもあたしは欲張りだからまだ足りないの。

「春哉、ちょっとずつ近づいてね」

「は？何に？」

「あたしに。あたし以上にあたしの事理解して」

「……上等」

そう言ってのけた春哉に愛おしさがこみ上げる。

春哉なら本当にあたしの全てを理解してくれそう。そして受け止めてくれそう。

だから春哉には全てを話せる気がする。  
もうすぐ公園に辿り着く。公園の景色が見えてきて、自転車の速度  
が落ちてくる。

再び心臓がざわめいたけど、大丈夫。春哉はきっと理解してくれる。

あたしの全てを理解して。

そんな人が1人でもいてくれたら、あたしはきっと生きていける  
から。

### 13 内緒の話をしようか

春哉が自転車を置いて公園に到着する。あたしは礼を言つて空いていたブランコに座った。

錆びたブランコはきい、きいと音を立てて今にも壊れそうだけど、壊れる事はなかった。

#### 13 内緒の話をしようか

春哉も隣に腰掛けてブランコを緩く動かす。

高校生2人が講演でブランコとが滑稽だけど、今は笑える気分じゃない。

心臓が嫌なくらいバクバク動いて泣きたくなつた。決意したはずなのにやつぱり伝えるのが怖いなんて。

何も言いださないあたしに春哉が話を切り出してくる事はない。

そのままお互い無言でブランコに座る。

途中で春哉のケータイのバイブがなつたけど、春哉がケータイに出る事はなかつた。

そのまま15分くらいが経過した。

そろそろ言いださなければ、そう決意して漕いでいたブランコを止めて春哉を見つめる。

こっちに気付いた春哉をあたしに視線を向けてくれた。  
街灯の光に照らされた春哉はハッキリ見えないけど、こっちに向ける視線だけはちゃんと感じた。

また言いだす勇気がなくなつて、言いだす前から泣きそうになつた。

そんなあたしに春哉は何かを言いたそうな顔をしてる。

“どうしたの？何かあつたの？”

多分春哉はそう聞きたいんだ。でも聞いてくれない。春哉も戸惑ってる。そんな春哉から話を振らせる訳にはいかない。あたしの問題なんだから。

今度こそ決意を決めて声を出した。

声は自分が思っていた以上に震えていて情けなかつた。

「あのや春哉」

「ん？」

春哉は聞く体制に入つてくれた。

体をこっちに向けて聞く姿勢を取り、優しい声に泣きそうになつた。でもそれを隠すかのように軽く笑つてごまかした。心配掛けないよう軽く言つて終わりにしたいと思つた。

「聞き流してくれてもいいんだけどさ。あんま真面目な顔されると困る

「じゃあ幸が上手い」と冗談めかして言つ「ただな

「あたしが口下手なの知つてるくせに性格悪いね」

意地悪だな春哉は。

でも茶化してくれた春哉に今度は本当に笑みがこぼれた。いつだつてそうだ、春哉はあたしをこいつやって笑わせてくれる。落ち着かせてくれる。

そしていつまでも話を聞いてくれる。

30分程度なら公園によつてもいいつて言つてくれたけど30分はもう過ぎようとしてる。

でも春哉はあたしを見捨てない。いつもやつて待つてくれる。これ以

上春哉の時間を奪つたらいけない、はやく切りだせーー！

「あたしが一重人格つて前にも言つたよね。本当の最初に会つた人格のほうの幸はずつと眠つてるって」

「うん、聞いた」

「最近ね、記憶が飛ぶんだ。本の一瞬なんだよ。1分～2分くらい、もっと短いかもしれない。1日に何回もあれば3日に1回しか来ない日もある」

「うん」

春哉はまだ何も言つてこない。

だからあたしもみじめになるからゆっくり話したくなくて、早口で吐き捨てるように話した。

「なんだか良くなくて先生に相談したんだよね。あ、先生つてあんたのおばさんも通つてる精神内科のね」

「後藤先生だな」

「そう。でね、言われたんだあ」

“何を？”

そう期待される続きを促す言葉を春哉は言わなかつた。

ただ驚いたように目を大きくして、固まつてしまつてゐる。多分春哉はもう理解してゐる。

察しがいいから、でも万が一春哉の考えが間違つてない事を確認させるためにも、ちゃんと言葉であたしが言わなきやいけない。

春哉ごめんね。でも言つ事であたし自身もきつとすつきりすると思ふから……

「先生がさ……言つたんだ。きつともう1人のあたし……本物の“

「倉田幸」が田を覚まそうとしてるんだって

そう言つた瞬間、春哉の瞳が揺れたのが分かつた。

口元をあからさまに引きつらせて、かなり動搖してゐる。春哉はお母さんが精神病を患つてゐるから同じ精神疾患の人に対する対応は上手い。

でも今の春哉は対応が全くできない状態だった。

そしてそれを見て嬉しく感じた。そんなに動搖するほど大切なないと自惚れた。

「な、なんで……でもまだ仮定だよなー? 決まつた訳じゃ……っ!」「そうだね仮定だね。でもきっと本当のことだよ。経験あるんだよね、記憶抜け落ちるのって。まだ幸が眠つてない時、無意識にあたし達の人格が入り混じつてた時、気づいたら朝になつてたとか夜になつてたとか良くあつたから」

「そんな……」

がっくりとうなだれた春哉。

悲しそうな声を出して、肩を震わせて……ありがとう、そんなに悲しんでくれるつて思わなかつた。

春哉の事だから毅然とした態度を取らなきゃつて思つてるんだろうけど、あたしは逆に嬉しい。

そんな悲しんでくれるほどの存在だと確認できてうれしい。試すようでごめんね。でもそんな風でしか測れないの。

でも軽く言つたつもりでも他人に話せば現実を認めた事になる。心臓がズキズキ痛んで目頭が熱くなつて、顔に熱が集中しました。その時、春哉が顔を上げた。まだ泣いてない、でも泣きそうな顔。

「そ、それってさ……幸のおばさん知つてんの?」

「知らない。まだ仮定だから期待させるのも可哀想じやない。だか

ら先生と確信が持てるまでは秘密でここにしているの

「いいのかよ……」

「いや、だつて母さんは幸に戻つて欲しいんだから。

「いいよ別に。どうせ今言つたら母さんは病院に通えしか言つてこないしね。だれもあたしの事を必要としなくなる」

「幸……」

「あたしの存在なんか早く無くなれって言つんだよ。遠まわしに病院に行けなんて言つてさ、参つちやうかね」

そんな事は言われてないけど、卑屈な思考のおかげで孤立した気分になる。

幼いころ経験してきたトラウマと同じものかもしれない。それほどショックだった。

母さんに幸を返せと言わたることに。あたしの全人格を否定されたこと。

遂にこらえきれなくなつた涙が頬を辛い、後続部隊がボロボロと田から溢れて行く。

その姿を見て春哉も最初はギョッとしてたけど、何でか春哉もつられて泣きだした。可笑しいじゃない、ここは慰めるもんじゃないの？

「は、春哉！？」

「泣けよ馬鹿！泣いちまえよ！辛いことがあつたら泣くのがいいんだ！そりやつて我慢して溜め込むから精神やられちまうんだよー！」

「つー」

春哉のその言葉を聞いたら、もつ耐える事なんてできなかつた。

ブランコから飛び降りて春哉に飛び込んだ。春哉はしっかりとあたしを受け止めてくれた。

「消えたくないよー消えたくないよーまだ倉田幸として生きたい  
！春と一緒に居たいよー！」

「俺だつて幸と一緒に居たいんだよー倉田幸じやなくてお前と一緒に  
に居たいんだよー！」

死にたくない、あたしはまだ生きてたい。

まだやりたい事一杯ある。春哉としたい事もいっぱいある。  
そして春哉の言葉が嬉しくて嬉しくて、余計に消えたくなくなつて  
いく。この世界にまだ存在していいたい。

まだ春哉と一緒にいたい。

ここまで好きになつたのに、ここまで生活が順調になつてきたのに、  
なんで今それを幸に奪われなきやいけないのー？

そんなのおかしい。あたしだつて幸せになる権利はあるはずなのにー！  
幸はあたしが苦労して手に入れた物を目を覚ましてすぐに手に入れ  
る。それが悔しい。

2人でわんわん泣き続けたら次第に涙も引っ込んでいった。  
泣き疲れて、そのまま何も喋らずに春哉にしがみつく。この腕はあ  
たしの物なのに、幸になんかに渡したくない。

春哉も大分落ち着いたのか、鼻を鳴らしてあたしに話しかけてきた。  
声は少し掠れてて、小さい声だつたけど近くにいたあたしにははつ  
きりと聞こえた。

「幸、約束しようぜ」

「……何を？」

「ずっと一緒にいるんだ。別れるとかマジあり得ないから。これか  
ら何十年もずっと」

「難しい事言つね。先の事なんてわかんない。春哉が浮氣するかも

よ」

「しねえよ。俺がしないからお前もするな。ずっと俺だけ見てる」

春哉らしくないな、でもいいね。

ずっと春哉だけ見てれたらきっと幸せだ。あたしもずっと春哉だけを見てみたい。

そして春哉の話を聞いてテレビを思い出した。

「知ってる春哉、約束って言うのはその人の一部を縛ると同じなんだよ。テレビで見た事ある」

「ふうん……」

「だから重たい約束は身体が塞がれたように苦しくなる。そしてそれが忘れられない」

言つてる意味分かるかな、これはあたしからのプロポーズだよ。  
あたしを忘れないでつて言つね。  
体が塞がれた様に苦しくなれば、絶対に忘れないでしょ？ねえ春哉、  
あたしはその約束が欲しいよ。  
そしてそれは春哉も同じだった。

「面白いなそれ。じゃあさつき行つた俺の約束は絶対実行な

「だから重いつて」

「それくらいがいいんだつて。愛の試練だよ」

「あははー！馬鹿みたい。ばーか、春哉のばーか……」

内緒の話をしようか。

これで私達を邪魔できる人はいなくなる。

「なあ幸、今週どつか出かけない？」

春哉からの正式なデートのお誘い。

その言葉だけで一瞬頭の中が真っ白になつた。

#### 14 幸せな時間

春哉とデート、デート、デート…？

ポンと赤くなつたあたしを春哉は一瞬にやつとした顔で見てきた。  
くそっ！こんな油断した顔を春哉に見られてしまつた。でもそんな場合じゃない。

デート……本当にデートなんだよね。またラーメン屋によつて帰ろう

う話だよね？朝から2人でどつかに行くんだよね？

こうじうの経験した事がないからどう反応していいのか分からぬけど、答えは決まつてる。断る理由なんてもちろんない。

「ど、どこでもいい？」  
「どこでもいいよ」

春哉はあつさりとどこでも連れて行く宣言をした。

それならあたしが行きたい場所を選んでもいいんだよね。あたしは恋人とどうしても行つてみたい場所がある。その場所は簡単。少しらしくないかもしない。可愛げのないあたしには似合わない場所かもしれないけど、でもこんなの一生に一度の経験になるかもしない。

恥も何も捨てなきゃ言えない。

「ディ、ディズニーランド……」

「ランド?」

聞き返した春哉に小さく頷くしかできなかつた。

らしくなつて思つてるのかもしれない。お前の柄じゃねえだろつて思われるかも……

でも春哉はあつさりそれを了承してくれた。

「いいよ、じゃあ10時に東京駅な。そっから行こう  
「ん」

ディズニーランド……彼氏と行くのをずっと憧れてた。いや、行くの自体憧れてたのかもしれない。

家族と仲の良くないあたしからすればディズニーランドは聖地だ。テレビでアナウンサーが家族が恋人、友達同士と着てている人にインタビューやしてゐるのを見ながら、行きたいっていつも思つてた。

家族仲が悪い挙句に友達のいないあたしは一緒に言つてくれる人もいないし、行きたいけど一人で行く勇気もなかつたから、正直今まで1回も言つた事がなかつた。

でもその夢がついに叶うのだ。大げさだけど、もう思い残すことはないかもしねり。

とりあえず早く起きなきゃ！化粧も服も頑張らなきゃ！

当田、遅刻しないためにも少し早めに出ることにした。でも早く着き過ぎない程度にだけど。

張り切り過ぎてるつて思われるのも格好悪いし、正直春哉がもう来

てくれてたらなつて言う期待も少しあつた。  
でも春哉はやっぱり期待を裏切らないね。

待ち合わせ時間の10分前に東京駅についたけど、春哉は既について待つてくれていた。

無表情で人ごみの中であたしを待つてる春哉は惚氣かもしけないが、格好良く見えた。

制服からメン屋の服しか来てるイメージがなかつたし、私服を見た事があまりなかつたからすぐ新鮮だ。

春哉もこっちに気付いたのか視線を向けてきたので、声をかけようとしたけど何だかボケーとこっちを見てる。

何考えてるんだあいつ？なんか焦点なつてない気もするし……

「うあつー！」

「ほけつとしてないで。何してんの？早く行こうつよ」

案の定声をかけられ、あからさまに春哉は驚いた。こっちに視線を向けてたと持ったのに、実際は何を見て何を感じてたんだろうか。何だか少しムカついてさつさと先に歩いていけば、春哉が早足でたしを追いかけた。

そのまま切符を買ってホームに向かう。ホームの人多さに少しびっくりしてしまった。この人たちみんな行くのかな？やつぱディズニーランドって人気なんだな。

ディズニーランド駅で降りたあたしたちはランドに向かつて歩く。シーに向かう人は更にモノレールみたいなものに乗るから違う方向に歩いていく。少し人数が少なくなつたかな？

そして前方にはホテルと夢にまで見た本物のディズニーランド…こんなに近かつたんだ！初めて来たよディズニーランドに！

はやる気持ちを抑えてフリー・パスを買って中に入る。

そしたら入口の広場にはテレビに出ていたのとまったく同じのミッキーの姿があった。

「ミッキー！」

「あ、おい幸…」

春哉の制止も無視して走つていけば、ミッキーは写真撮影をしていた。

係員さんが並べば一緒に写真を取れますよって教えてくれて、あたしは早速並ぶ事にした。

後から切れた顔の春哉がやつてきたけど、動く気のないあたしにこも言つ事なく一緒に並んでくれた。

炎天下の中で並ぶのはきついけど、これがレジャー・ランドの醍醐味だ。ミッキーと写真を取れるならあたしは頑張るよ。

そして35分くらい待つてやつとミッキーと写真を取れた。

肩をたたかれて握手して手を振つてくれる。ミッキーかわいすぎる！目的を1つ果たしたし、後は乗りたいアトラクションがいっぱいある！パーさんのハーハントにパズライトイヤーにスプラッシュマウンテン、あとスペースマウンテンも乗りたい！

ミッキーたちの家にも行きたいし、ホーンテッドマンションにも行ってみたい。でもこれだけ人が多かったら全部は無理だろう。

早くファストパスを取らなきやー！時間を1秒も無駄にはできないし！春哉はそんなあたしに文句一つ言わず付き合つてくれた。

「春哉！次行！」

スペースマウンテンとスプラッシュマウンテンのファストパスとつて念願のハーネントに乗れて、近くにあつたからイツアスモールワールドにも乗れた。次はホーンテッドマンションだね！でも春哉は既にくたくたのようだ。少し早くなーい？

「幸、飯食おう。もうすぐ皿になるし」

「えーホーンテッドマンション行こいよ」

「今食つとかないと時間になつたら人が多くて席取れなくなるよ。俺疲れだし……」

情けないなあ春哉は……仕方ないか付き合わせてるんだし、春哉の意見も聞いてあげなきやね。

頷いたあたしに春哉はあからさまに安どの表情を浮かべた。あんたどんだけ休みたかったんだよ。

「どこで食いたい？」

「あんまりどこかで一いつ通つの無いから、歩きながら探さうよ」

「そうしようか」

そう話しながら春哉の手を握った。今あたしの横を通り過ぎたカッフルが手をつけないでたから。

春哉は案の定動搖したけど、あたしはあくまで平静を装つた。

「なんで？彼女が彼氏の手を握つてもおかしい事ないじゃん

「や、そうだよな。そうだよなー！」

そうだよ、あたしたちは恋人なんだから別にいいでしょ。

春哉は加減しないのか、力強くに行つてきたから文句をつけたけど、でもいいや。

暑い中お互に手に汗をかいたけど、でも不思議と深いじやなかつ

た。

その後はイタリアンレストランで「」飯を食べてホーンテッドマンションに乗つてまたバズライトイヤーのファストバスを取りに行つた。時間的に最後のファストバスになつてしまつたけど、でもいいや。これだけ取れれば十分だよね。

その後はファストバスを使ってアトラクションを乗り、いつの間にか辺りは薄暗くなり始めていた。

「春哉、Hレクトリカルパレード見たい。席取る?」

「え？ その間にアトラクションのらねえの？ 待ち時間短くなるぞ」

「駄目、パレード見たい」

「そつなん？ ジャあ少し早いけど席取る？」

「取る」

早めに席を取つたおかげで最前列を取れた。

時間が近づいてくるにつれて多くなる人。そしてスピーカーから声が聞こえてくる事には沢山の人が見るために待機していた。そしてスピーカーから音楽が流れ出す。あの独特的の音楽が。まだライトアップされた物は来てないけど、あたしは興奮してジッと通路を眺める。

早く来ないかな？ 早く来ないかな？ 子供のように心の中で思いながら来るのを待つた。

パレードは綺麗だった。

初めて見たけど、キラキラ光つて楽しそうで、本当に綺麗だった。小さな子たちのはしゃぐ声が聞こえて、隣に座つての家族も綺麗だねつて話している。

本当にすごい。今日来れて良かった……

今日は幸が出てくることもなかつたし、記憶が途切れることもなか

つた。楽しかった、今までの人生で多分一番楽しかったんじゃないのかな？

その時、春哉があたしの手を握ってきた。

振り返ればライトに照らされた春哉が気まずそうにして笑っている。

「ほらや、夏でも夜は冷え込むからさ」

「……馬鹿な冗談は言わない方がいいよ」

でも振りほどかないあたしも少し冷えたのかもしれない。

あーあ折角集中してみてたのに集中できなくなっちゃったじゃん。

夏の暑さなんか感じない。手の方が何倍も暑く感じる。

今の自分の顔を見られたくないであたしは真っすぐパレードを見つめた。

最初で最後かもしれないじゃない。

でもこんな幸せな日を一生忘れない。

## 15 讓りたくないなんなかつたのに

「あの人が一之瀬君、優しい人だね」

「そうだね。あなたの彼氏だ」

「あたしのじゃなくて貴方なのでしょう?」

そうだ、あたしの彼氏だ。でももう違う。

あたしじゃなくて世間的にはあなたの彼氏になる。

15 譲りたくないなんかつたのに

「すつしぐ楽しかつたな!」

「良かつたな」

そつ言つて笑つてくれた春哉を見て幸せになる。

ディズニーも閉園の時間になつて、電車に乗る為に皆が駅に向かつていく。

それはあたし達も例外じゃなく、この満員の電車に乗らなければいけない。少し苦しいけど、でも今までの樂しさを考えたら全然苦じやない。

ディズニーランドは樂しいところだった。綺麗な園内は夢のようにたつた。時間を忘れたかのように幸せで、一生ここから出たくないと思つた。

もうすぐ夢が覚めて現実が始まる。もつ永遠にあのまま夢のままでいてくれたら幸せだつたのに。

夜も遅かつたからマックがどこかでご飯を食べて帰ろつと春哉が言ってくれた。それを聞いて安心した理由は分かつてゐる。

良かった、まだ戻らなくていいんだ。もう少しだけこの幸せに浸つてもいいんだな。そう思えた。

春哉との他愛のない話は楽しかった。

電車から降りて駅の仲のマックでご飯を食べて少し話をする。

それだけの事なのに幸せで嬉しかった。

くだらない内容だったけど、春哉が話せば面白くて、あたしがくだらない内容を話しても春哉が笑つて突っ込んでくれるから、それに対してあたしが笑つた。

そのまま1時間程度話をして、春哉が帰るいと促す。

あーあ夢の時間が終わっちゃつた。

春哉の自転車の後ろに座る。もつーーーはあたしの特等席だ。そして自転車をこぐ春哉と少しだけ会話をしながら帰つた。もう少しゅつくり走つてもいいのに。早く家に着いちゃうじやん。そして自転車で20分程度走つたら見慣れた住宅街に着き、あたしの家の近くまで自転車は走つてきた。

いつもの曲がり道で春哉はあたしを降ろして「ゆつくつ寝ろよ」と笑つて自転車を再び漕ごうとした。

でも言いたい事があつたあたしはそれを遮つて、春哉の服の袖をつかんだ。

振りかえつた春哉に言いたい事は沢山あつたけど、一番言いたい事だけを口にした。

「春哉、ありがとう」

「俺こそめっちゃ楽しかった」

「あたし絶対に忘れないから。ありがとう」

本当に忘れない。こんな楽しい日をさせてくれてありがとう。

「幸、お帰りなさい」

「ただいま。今から準備するよ」

「幸、その事なんだけど……無理しなくていいのよ」

家に帰った母さんが心配そうな顔で出迎えてくれた。無理をしなくていいという言葉だけであたしがどのくらい救われるのかを母さんは知らない。

母さんは今あたしを愛してくれてる。それが分かつだけで幸せだから別にいいの。

首を振つて大丈夫、と笑つたあたしは部屋に戻り、荷物を整理した。

明日から病院に入院する。正確には幸を表に出すために。

今が一番の時期なんだとか、後藤先生の話で、母さんはそれに迷つたけどあたしが同意した。

この肉体を幸に返す時が来たようだ。どうせ一つの肉体に2つの人格があるのはあり得ない。片方は消えなくちゃいけない。

その時が来ただけ。

だから嬉しかつた。春哉との時間が、最後になるかもしれないけど、あんな幸せな思い出は幸にはないはずだ。

これから作つていくのかもしれないけど、今はあたしの方が幸せだ。それだけを心の支えにあたしは消えていくから。だから大丈夫。

「幸ちゃん、こんにちは  
「こんにちは」

<sup>1)</sup>当選者から紹介を受けた大きい総合病院。

そこにはあたしは入院することにした。あたしの診察をする時は寄進の知れた後藤先生がここまで来て診察してくれる。

でも本物の幸が現れてパニックを起こした時用に病院にいつもいてほしいから入院と言う形になつた。

先生はにっこりと笑つて、あたしのカルテをめくる。

横にはこの大学病院の精神科医の女の先生も控えている。女の先生は気をほぐすために、あたしに他愛のない事を話しかけてくれた。

「幸ちゃん、今日は少しもう一人の幸ちゃんをお話ししてほしいんだ」

「はい」

「だからゆつくりでいい。もう一人の幸ちゃんに話しかけてくれないかな?」

そんなので幸が現れるかは分からない。

でも言われたとおりに田を閉じて真っ暗な世界にして幸に話しかける。しつこくしつこく。

そしてその時、頭の中にもう一人の声が聞こえた。

「幸ちゃん、怖いよ。どうしたの?」

もう一人のあたし。倉田幸。ここはあたしに起これられて明らかに怯えている。

まだ外の世界が怖いんだ。

「もういい加減出てきなよ。何年間ひきこもるんだよ」

「だつて……外の世界は怖い。それに幸ちゃんも出てきてほしくないでしょ?」

「周りがあんたを望んでる。あたしの意思は関係ない」

「でも……」

「でもじゃない！なんなんだよあんたは！望まれてる癖に！愛されてる癖に！あたしが必死になつてやつてきた物をあんたはただ表に出るだけで手に入れる！それの何が不満なんだよ…！」

声を荒げたあたしに幸は酷く怯えた。

苛立つているのはあたしなんだ。そんな態度を取られたらますます苛立つてしまつ。

幸は怖い怖いとぐずぐず泣き続け、あたしは幸が泣きやむのをただ待つしかない。

春哉は見捨てないといいな、こんな泣き虫だからウザがられるかも。でもあたしですら受け入れてくれたんだ。この幸の事だつて大切にしてくれる。

胸に感じた痛みを取り除く方法は見つからないけど、でもこいつはそろそろ起きるべきなんだ。

「なあ幸、もう終わりにしよう」

「何を？」

「かくれんぼ。あんたが怖がつた父親はもうここにもいない。あんたは自由なんだよ。母さんだつてあんたが現れるのを望んでる。一体何が不満なんだ？」

「だつて……ずっと出てないのに、こきなり出るなんて怖いよ」

「あたしをこの世界に勝手に作り上げて表に出して放置したくせに甘えてんじゃねえよ」

厳しい口調で言えばまた怯える。

同じ顔で止めてほし。はつきり言つて氣味が悪いよ。でも許してあげる。

悲しくて苦しいけど全部譲つてあげる。あんたにあげるよ。友達も

母さんも春哉も全部……  
涙が頬を伝い、胸がキリキリと締め付けられた。

そんなあたしを見て、幸は驚いている。

「幸ちゃん……」

「もう駄目なんだよ。これ以上あたしに迷惑かけないでよ。いずれにしてもあなたにあたしは全てを譲らなきゃいけないんだ。これ以上大切な物はいらないよ」

「……」

幸があたしの涙を見て悲しそうに俯いて、でも何かを決意したかのように顔を上げた。

遅いよ馬鹿。でもそれで決意で来たのなら良かつたのかもしない。立ちあがつた幸にあたしは見送りの言葉を送った。

「じゃあね、暫くはここで見届けてあげる。心配がなくなつたらあたしは消えるから」

「……あたしはやつぱり怖いよ」

そう言つて幸はあたしの前から姿を消した。どうやら本当に出て行つたみたいだ。

あーあ、暫くはここで一人があ……一人は慣れてたはずなのに、今はどうしようもない辛いや。

誰か来てくれないかな。でももう新しい人格は勘弁だ。そう考えたらやつぱ一人でここにいるしかない。

寂しい、寂しい寂しい寂しい寂しい寂しい寂しい寂しい寂しい寂しい寂しい寂しい！！！

消えるのは嫌だ！幸なんか死んでしまえばいいのに……

そう考へてしまつた自分が情けない。

結局あたしは何もかも失う運命だったのだ。ぐつの音も出ない。最後に楽しい思い出を手に入れたからよしとしよう。

でもこの止まらない胸の痛みとやるせない怒りは止みすればいいー!?  
これを暫く体感しなきゃいけないなんて死んでしまいそうだ。もつ  
早く消えたい。でも消える方法が分からない。  
だって消えたくないんだから。

とりあえず心を鎮めるために田を開じた。何も聞こえないように、  
見えないように。眠つてしまおう。

「君が……幸ちゃんかな?」  
「…………はい」

何も聞こえない。

必死にあがいてた糸があつたと切れた。  
そして私は消えていく。

## 16 例え手に入れたとしても

数年ぶりの外の世界は何もかもが変わつて、何もかもが恐ろしかつた。

あたしを元の暗闇に戻してくれたらいいのに、もう一人のあたしはそれを許してくれない。

あたしの目の前には口元を手で押さえている少し老けてしまったお母さんと、幸が大好きな先生だった。

### 16 例え手に入れたとしても

「貴方、幸なの？」

「……お母さん、だよね？」

お母さんは嬉しそうだけど、どこか複雑そうな顔をした。

そうだよね、あたしなんかに戻つて欲しくないよね。だってもう1人のあたしと過ごした時間の方がお母さんは長いもんね。

確かに7歳だ。あたしがもう1人のあたしを作り出して中に閉じこもつたのは、だからお母さんとは7歳までの記憶しかない。いや、閉じこもる前からもう1人のあたしは存在してた。実質一緒過ごした時間はもつと短かつたはず。

そんな子を今更子供なんて可笑しいよね。

先生は少し驚いた顔をしたけど、すぐにいつもの優しい表情に戻つた。

「ここにちは幸ちゃん。先生の事は知ってるかな？」

「……知つて、ます。後藤先生」

「そうだね。これから幸ちゃんは少し病院に入院してリハビリしていかなきゃいけないんだ。でもすぐに学校にも行けるようになるからね」

行きたくないよ。このまま寝かせておいてくれたら良かつたのに。幸は学校で上手くやつてたから。今更あたしなんかが出てきてどうしていいのか分からぬ。

あたしの記憶はもうずっと前で止まってしまった。

そんなあたしが今更出てきた所で、どうやって生きて行けばいいんだろう。勉強も分からぬ、他人と話すのも怖い。そんなんで社会になんて出て行けないよ。

それからじばらくリハビリを受けられ、あたしは10月の初めに学校に行かなきゃいけなくなつた。

勉強が分からないあたしに先生は障害者が集まる子供たちが勉強する場所を紹介してきたけど、正直自分が障害児だなんて思いたくなかったからそれを拒否した。

あたしは障害児なの？そんな事急に言われても困るよ……

学校で一之瀬君を見かけたけど、話しかける事は出来なかつた。だって幸の彼氏だから自分が声をかけるのは気が引けた。

でもあたしの事を知つてるのは学校では彼しかいない。話しかけてくれたらどんなに嬉しいかわからない。

でも今のあたしは確実に学校に馴染めてなかつた。

「幸、学校はどう？..」

「……どうにも」

お母さんが出されたご飯を黙々と食べる。それを少し残念そうに。お母さんはしてたけど、反応はできない。

知ってる。このご飯は幸が好きだった奴だよね。お母さんは何も考えてないんだろうな、あたしは別にこれが好きってわけじゃないのに。

味付けも甘い味付けから薄味に変った。多分幸がうす味が好きだつたからなんだな。あたしは甘い味付けが好きなのに。

部屋の中も幸が集めたグッズやら何やらで埋め尽くされてる。一ノ瀬君と撮ったプリクラ、クラスの友達と遊んでる写真、母さんと出かけた時に買つてもらつた服。

違つ違つ違つ。ここはあたしの部屋じゃない。あたしの場所じゃない。

どこもここも幸の残り香がある。家にも学校にも病院にも！結局あたしの居場所なんてどこにもないんじゃない！

あたしが所有してたものなんて一つもない。この部屋のどこにも！小学生の時に買つた机は新しいものに変わってる。使つてた教科書もどこかに捨てられてる。小学校の卒業アルバムに映つてるのは、あたしじゃなくて幸だけ。

あたしが戻つてきた意味があるの？こんなただの生き地獄だよ！

「幸……幸、出できてよ」

お願い、あたしを元に戻して。暗い世界に戻して！  
こんな世界でこれから生きるのなんて無理に決まってる。あたしには自信がない。

返事のない幸に苛立ちが募り、近くにあつたクッションを投げ捨てた。クッションが壁にぶつかり床に落ちる。

あのクッションも幸の物。このベッドも幸の物。この枕も幸の物、毛布も布団も全部全部！！

じゃああたしは誰なの？貴方が幸なの？

ベッドで眠るのが怖くて、そのまま床にうずくまるように寝つた。体が痛いとか考えなかつた。今のこの状況の方が怖いから。

「よーつす倉田さん」

次の日、学校に行つて昼休みになれば、クラスの人声をかけてきた。

名前はまだ覚えてない。でも幸と仲が良かつた子だよね。その子はにこにこ笑いながら、あたしに話題を提供してくれる。

なんて返せばいい？なんて返せば差支えの無い会話になる？何も返せないあたしに、その人はあたしの肩を軽くたたいて、笑つている。

「なんだよ倉田さん。そんなキャラじゃないだろ？そこでいつもの毒舌来てよ」

毒舌つて何？何を言えばそうなるの？幸じゃないあたしが言つたら、貴方は怒るでしょ？

違う、あたしは幸じやないの。貴方の知つてる幸なんかじゃないの。でもその子も段々反応を返さないあたしに笑みが消えて無表情になつていく。それを見るのが恐ろしくて顔を上げれない。

「こつもと違うな。つまんねえよー」

つまらない。その言葉が重くのしかかつた。そうだ、あたしはつまらない人間なんだ。

話しかけてくれる人に相槌1つ打てないつまらない人間。こんなあたしに話しかけられる資格はない。

言い返せない、怖い。嫌われた。

でもあたしは幸じゃないから。それなのに幸の様に扱わないでよー！  
その時、頭上でその子が声を上げた。

「よお一之瀬、倉田さんに用か？でも今日の倉田さんは何にも反応してくれねえよ。お人形さんみてえ」

「お前だからじゃないのか？」

「なんだよそれー！」

一之瀬君？

急に腕を惹かれた事が怖くて直接目を見れない。でも一之瀬君だ。  
一之瀬君はそのまま何も言わずにおたしを引っ張って教室を出た。  
助けてくれた？それとも返事ぐらいしろよって怒る気でいるのかな  
……どうせよ怖い。逃げたい……

「あいつらも悪気はないんだ。怒んないでやつてくれ

屋上で話しかけられた声は思つた以上に優しい物で、あたしを責める意思がないんだと確認したら少し力が抜けてしまった。

慌てて首を横に振つて、あの人達に怒りは感じないとアピールする。

一之瀬君は助けてくれたんだ……あんな中に入るのはすげく勇気がいるはずなのに、幸の言つてた通り、一之瀬君は優しい人だ。  
思いきつてお礼を言えば、一之瀬君は首を横に振つた。

「あ、ありがとう。助けてくれて」

「別に礼言われる程じゃないよ」

「でも、嬉しかった、から……幸がね、言つてた。一之瀬君は優しい人だつて」

言つた後にしまつたと思つたけど、一之瀬君の表情が変わらないから、もしかしたら平氣なのかなと思つた。

あたしは彼に幸の事を色々聞きたい。だつてあたしは幸の様にならなきやいけないから。

偽るのは不安だと言われば嘘になる。でもそれを我慢しなくちゃいけないんだ。

こんな事をするくらいなら幸が出てきてくれればいいのに、幸はあたしの呼びかけに応えてくれない。意地悪だ。あたしをこんな世界に1人放り捨てるなんて……

「ねえ、幸はどんな子だつた？」

「え？」

「幸の真似、しなきやつて……だから幸の事、色々教えてほしくて」

一之瀬君が訳が分からぬと言つように首をかしげた。理由はあまり言いたくないんだけど、一之瀬君は知りたがつていて。でも自分から言うのは気が引ける。そう思つていた矢先に一之瀬君が口を開いた。

「何で真似する必要があんの？」

「だつて……皆、幸の事を聞いてくるから。あたし、話についていけなくて……」

それを言つた瞬間、一之瀬君の表情が変わる。その顔はふざけた事をするな、と物語ついていた。

ビックリして少し後ずさつてしまつたあたしに一之瀬君はぐきを刺

してあた。低い声で、怒鳴る訳じやないけど威嚇するよつな。

「やうやくのやつへると自分の辛くなるよ。止めた方がいい」

「でも……」

「止めて。幸の真似されると頭にくる」

一之瀬君はあたしに気を遣つてる？それともあたしを嫌つてる？でも幸の真似をしてほしくないって言われて怖くなつた。そんなに悪い事が自分では分からぬいけど、怒られるくらい悪い事なんだ。小さな声でしか謝れない自分が腹立たしい。そんな事ばかりだと嫌われてしまつのに……

一之瀬君も慌てて謝つてきたけど、一之瀬君は悪くない。悪いのはあたしなんだ。

早く授業が始まつて欲しい。今は氣まずいよ……

結局何も変わらない。

肉体を手に入れても、私は何も手に入らないんだ。

## 17 理解者は現れない

他人は怖い。周りの視線が気になる。

放つといてほしい、暗闇に戻してほしい、幸と比べるくらいなら幸に話しかければいい。

だつて貴方達の知ってる幸はあたしじゃない。

### 17 理解者は現れない

今日も石原君と藤田さんが挨拶してきた。

それに返事が出来なくて俯いていれば、そのまま一緒に投稿になってしまふ。それが怖くて更に口まで閉ざして会話に入らないようになれば、自分たちは邪魔なのか?って聞かれる。

そう言う訳じやない。あたしも普通にお話ししたい、けどその会話に割り込む事が出来ないだけ。

口に出したくても出てこない。そのまま黙っていたら、2人は先に行くな。と言つて去つていつてしまふ。

またやつてしまつた。今度こそ完全に嫌われた。

いや、嫌われた方が楽なんだ。だつての人たちはもう1人の幸しか知らないから、そんな人たちは嫌われた方が……

自分でそう言い聞かせてるけど、正直寂しいし苦しい。返事さえできたら嫌われないんだろうか。そう考えてしまう。

せめて相槌ぐらい打てればいいのに、でも打てないからあたしは今1人でいる。自分の言いたい事を言えないから勘違いされて去られてしまう。

全部あたしが悪い。

朝から悲しくなつてしまつたけど、お昼休み、屋上に逃げていたあたしの目の前に一之瀬君の姿を発見して、少しだけ心臓がはねた。一之瀬君は幸の彼氏で、あたしの事もちゃんと知つてて、この間は助けてくれた。優しい優しい幸の彼氏。

一之瀬君になら話しかけられるかもしない。彼はあたしをちゃんと分かつてくれる。あたしが話しかけても返事を返してくれるはず。

自らの体に鞭を打ち、一之瀬君の側に向かう。

「お、おはよー」  
「……おはよー」

一之瀬君はいきなり声をかけたあたしに驚いてたけど、ちゃんと返事を返してくれた。

良かった……無視されなかつた。

一之瀬君は不思議な人。幸の彼氏だつたから幸の事を理解している。そしてあたしの存在を認めてくれる。幸と比較しない。それは一之瀬君が敢えて口にしないだけかもしないけど、それがどれだけ救いになつてるか分からない。

一之瀬君になら頑張つて話しかけようつて思えてくる。

「き、昨日何してた?」「ずっとバイトだつたな」

ラーメン屋さんだよね。幸がいつも嬉しそうにうつうつと見てた。

幸が公に一之瀬君の彼女だつて披露する唯一の場所。あそこで一之瀬君のバイトの先輩たちと話している幸は嬉しそうだつた。なんだか少しだけ悔しくて上手く笑い返せなかつた。

そのまま会話がなくなってしまった、気まずい雰囲気になる。何か話題を探さなきゃと思つてゐるあたしとは対照的に、一之瀬君は特に会話をしようとしている感じではない。

あたしとの会話、嫌なのかな……そう思つたら気分がどんどん下がつて、逃げ出しだくなる。

でも教室に逃げたらもつと悲しいのは分かつてゐるから、足が縛い付けられた様に動かなくなつた。

生徒も段々いなくなり、5限目の授業開始5分前のチャイムが鳴る。戻らなきゃ。そう思つたけど一之瀬君が動く気配はない。このままここにいるのかな。

「もじんないの？」

「う、うん。もう少しふにいたいな……黙り、かな」

「黙りじゃないけど」

もう少しふにいたい。初めてのサボリ言つ行為に少しだけワクワクしてゐるあたしは小学生レベルだ。

こうじうの一度もした事が無かつたから新鮮だ。

なんだか会話をしなくとも居心地は悪くなくて、あたしはそのまま空をポーっと見つめていた。

それから10分くらいして、何だか一之瀬君に無償に言いたい事が出てきて、ポツコと呑くように小さな声を出した。

「IJの間からね、幸と話ができるの？」

「……」

「ずっと話しかけても返事をしてくれない。もういなくなつちやつたのかな」

一之瀬君からの返事はない。もしかして怒らせたのかもしれない。

でもあたしは構わず言葉を続けた。

一之瀬君は幸がいなくなつて悲しいんだよね。でもそれはあたしも同じ。幸が連絡を取つてくれなくて悲しい。唯一の味方がいなくなつたように感じる。

出たくなかつた表の世界に強制的に追い出されて、何も分からぬまま現実に向きあわされた。

幸が今どんな状況下は分からない。もしかしたら本当に消えてしまつたのかも……

「幸はあたしを怒つてきた。すぐ怖かつた……あたしはまだ外の世界に出る勇気がないの」

「は？」

「だから話しかけて元の暗い世界に戻りたいのに、返事をしてくれない」

一之瀬君に言つたからつて何かが変わる訳じゃない、けど言わずに居られなかつた。

多分こんな事を言える相手が一之瀬君しかいないからつて言うのが大きいんだろうな。お母さんには言えないし、学校の人と言つたら、それこそ気味悪がられる。

でもこれが今のあたしの本心だから。表の世界は怖い。何も分からぬのに、こんな場所に行かされて、家に帰つたら週4でリハビリ施設に行って病院に行つて……ハツキリ言つて充実しているとは言い難い。

そこまでする価値は自分には無い。

空白の時間が長過ぎた。幸に体を預けすぎたんだ。

小学生と同じくらいの知能しかあたしには無い。それもそうだ、だつてあたしは小学生の時に幸を無理やり表に出して隠れてたから。今更学校の勉強なんて分からぬ。しかも高校の勉強なんてチンプ

ンキャンプン。

ただ幸が高校で友達ができたから、友達と過ごせたらいいだのうって言つ母さんと先生の気遣いで、あたしは今高校に行つてゐる。勉強はリハビリ施設で小学生の勉強からやり直し。こんな人間に皆何を期待してゐるんだう。

頑張つて、だなんて言つてほしくはない。生きて、ともかく言つてほしくもない。

何を言つてほしかなんて自分でもわからない。でもただ分かるのは……

「じゃあ戻れよ」

「え？」

一之瀬君の冷めた言葉に顔を上げた。視線の先には怒りを抑えきれない表情をしている一之瀬君がいた。  
ああ、怒らせてしまつたんだな。瞬時にそう感じたけど、謝ひうつとは思えなかつた。

なぜだか、このままでいいと思つた。

「戻れよ。自分の中に、幸を表に出せばいいんだ」

「一之瀬、君……」

名前を呼んでも返事が返つてくる事は無い。唇をかみしめて怒りに震える彼の脳裏にはきっと幸しか映つていない。なんだ、一之瀬君もやつぱり比較してゐるんだね。気持ちが妙に冷めて、頭の仲がクリアになつていいく。でも何も考えたくない。

でもね、一之瀬君が何を考えてるかは手に取るよつて分かるよ。何も考えなくてもね。

「俺と幸がどんな思いでいたかあなたは知ってるのか？幸は消えたくないって泣いてたんだ。でも頑張ろうって2人で決めてたんだ。なのにあんたはそれをあっさり奪つたくせに他の奴にばっか変化を求めて、自分は変わらうとしない」

「……」

「石原達が話しかけてるのに倉田さん返事すらしないだろ。それなのに周りに馴染めないと甘え過ぎなんじゃないのか？」

「だつて……」

「俺は正直、こんなことになるなら、ずっと幸のままでいてほしかったよ」

それが一之瀬君の本心だった。あたしに消えて幸に出てきてほしいって。

それはそうか。幸の彼氏だつたら当然だ。彼女の文句を同じ姿の奴から言われたら腹が立つてもおかしくない。

目から涙がこぼれた。心臓は全く痛くないのに。

悲しいなんて事は微塵も思わない。もしかしたら、あたしはどうかでこの展開を期待してたのかもしれない。

ボロボロに否定されて、消えてほしいと言われる事を。

涙は出たけれど、不思議と悲しくは無かった。

だつて私は誰かに否定されて、消える口実を探してたから。

## 18 少しずつ無くなっていく

あれから一之瀬君に話しかけてはいない。だつて怒っている人に話しかけても逆効果なのは知つてゐる。

お父さんがいつもそうだったから。

でも一之瀬君の否定の言葉は、あたしにも幸にも胸の奥まで響いたはずだ。

### 18 少しずつ無くなっていく

「あたしの子供の頃ってどんなだつた？」

不意に聞いた言葉にお母さんの目が丸くなるのが視界に入った。今まであたしは自分の事を何一つ聞いたりしなかつたから。でもお母さんに分かる訳がないよね。だつて幸と一緒に過ごした時間の方が長いんだから。

あたしと過ごしたのはたつた6年と数カ月。10年近く過ごしてゐる幸との方が思い出が多いのは必然。でも母さんは少しだけ笑つて幼い頃のあたしを言葉で例えた。

「泣き虫だつた」

「泣き虫？」

「そう、欲しい玩具があつたら泣いて欲しがつて、少しでも嫌な事があつたら泣いて怒る。泣かなかつた日をカレンダーに印つけてやるうかなつて思つてた」

でも確かに良く泣いて困らせてた氣がする。泣いたら助けてくれた

から。大声で泣き叫んだら、お父さんの暴力がなくなる事があったから。

泣けば済むんだと幼いながらに思つていた。子供の特権だ。でも幼いあたしに楽しい思い出なんてあまりない。全て父親のせいで壊されていく。

お母さんもこれ以上何も言えなくなってしまったのか、そのまま葉を伏せた。まあそりやね、口に出したくはないよね。

「ねえ幸、お母さんを恨んでる?」

「どうして?」

「あなたが辛い目に遭つたのはお母さんのせいだから……」

恨んだりどうかなるんだろうか。失くしてしまつた10年余りを取り戻せるんなら喜んで恨み続ける。

でも時間が戻る事はないし、お父さんが優しくなる事は無い。何も変わらないんだから無駄にエネルギーなんて使いたくないのが本音。あたしはお父さんが耐えられなかつたけど、幸はそれに耐えた。だから幸が全てを手に入れた、それだけ。

少しの嫉妬や羨望は混じるけど、幸はあたしよりも立派でしつかりしてる。文句のいい様も無い。

あたしの事を気にかけて、友達も作ろうとなかつた。口では何とでもいいながら、あたしに10年も平穏を与えてくれた。そんな幸にあたしは何も返してあげられない。

「別にお母さんの事恨んでない。恨んでも過去は変わらないから」

「そりやね……」

そり、何も変わらない。

この部屋が幸の匂いで満たされているのも、幸の好きな色でコードイネートされた部屋も、幸の大好きなぬいぐるみで囲まれたベッド

も、幸しか映つてない小学校と中学校の卒業アルバムも、何も変わらない。

そこにはたしがいた形跡は一つも残つておらず、また幸で埋め尽くされた空間にあたしが新たに自分の物を置くのは躊躇われた。幸の空間を崩してしまう、そんなこと誰も望んでない。そう思つたけで、新しい物を買う気力は無くなつた。

結局幸のお古を使い続けるあたしは、もしかして幸と同化してきたのかもしれない。

少しづつ自分の中の何かが無くなつていく気がする。最初から自分は何も持つてなかつたけど、持つてないなりの何かが無くなつていく。

家族だつたり、知能だつたり、玩具だつたり……逃げた自分が悪いのに。

だから決めたの。ずっと考えてた、一之瀬君に言われてからずっと。本当に望まれる結末。あたしが救われる方法。それを全部考えた。そして一つの結末に辿り着いた。客観的に見れば、自分には何のメリットもないけど、あたしから見れば、これが最高のハッピーエンドなのだ。

「お母さん、有難う

「幸?」

「あたし、病院に行きたいの」

それだけ告げたら、お母さんは理解したみたい。顔を真っ青にさせている。でももう決めたから、考えをかるつもりはない。必死で止めてくるお母さんを見て、愛されてる事を自覚した。

でもあたしの決意が固い事を知ったお母さんは説得を止めて病院に電話をかけた。これですべて終わる。

自分の部屋に行つて荷物をつめる。もつじんな部屋とはおれりば。

一生帰つてきてやるもんか。

勝手に幸せになっちゃえぱーい。あたしがこんな劣等感を感じてしまふから、こない所で。

この部屋に思い出なんて一つもない。あつても無くなつてしまつ。昔と今は違はずぎるから。やつぱり10年の日口は長過ぎたんだ。

全てを変えてしまつ。

だからもういらぬ。こんな部屋いらぬ、グッズも何もかも。全て清算したら全て新しく一掃してやう。

壁紙も変えて机も自分なりにカスタマイズしよう。ベッドだつてシーツを変えて、このグッズは全部捨ててやる。それで自分の好きな物で埋め尽くして行こう。

そんな未来が来るかは分からぬ、きっと来ないだろうけど。

でもこの部屋にいる必要ながなくなるという事実が嬉しくて仕方が無かつた。

次の日、学校を休んで病院に向かつたあたしを後藤先生が迎えてくれた。

お母さんは仕事があるから、終わつてくるみたい。一人になれる時間が長いのは嬉しいのやら悲しいのやらわからない。

でも仕事に向かう前にお母さんがあたしに振り返つた。

「幸、自分の好きなようにしなさい。貴方でも、もつ1人の貴方もお母さんは今度こそ1から愛して見せるから

「うん、ありがと」

去り際にお母さんが田じりをねぐつたのを田ぞといあたしはすぐこ田についた。

お母さんは災難だらうな。こんな子供持つて。

でも心配しないで、今度こそ全て終わらせるから。どんな結末になつても、今度こそしっかりと前を向いて人間らしく生きるから。

最後の対面なの。

後藤先生が中に入るのを促す。あたしはその後についていった。

最後の時は少しづつ近づいている。

全て無くしたら、また1から手に入れるから。

「幸、幸、起きて」

真っ暗な空間の殻の中に閉じこもって何日経ったか分からない。ここでは時間の感覚もない。お腹がすく事もない。泥のように眠つていれば、いつの間にか知らないうちに時間が立つていて。確かにこの生活は不便なんて無くて、何も考えなくて良くて、とても楽だ。

それでも、あたしには心残りしかない。

### 19 夢想少女

「この声は幸だな。またしつこいく話しかけてきて……

幸が話しかけてくるのは今に始まつた事じゃない。それこそ表に追い出した時は頻繁に話しかけてきた。もう一〇分に一回くらいのペターンで。

心えてあげないのは少し意地が悪かつたかもしだれないと、あたしなりに心を鬼にして幸の事を見守つてた。って言うのは美化しそぎか。

本当は悔しかつたから。幸を見たら、自分の中の汚い感情が渦を巻いて出てきそうだったから。

その感情で幸を再び気づ付けてしまわなかがすじ心配だった。それだけが不安だった。

だから今回も無視してやるつもりだったのに、あまりにも必死な声に応えない訳にはいかなかつた。

だつてこれがもうずっと続いている。時間の感覚が分からなかつて、どれだけ続いているか分からなければ、ずっと続いているから。

仕方なく起き上つてしまつすぐ前を見れば、全く同じ顔のあたしが立つてゐる。

泣いてるかと思つたけど、どうやら泣いては無いみたい。見た事ない様な凛とした表情をしていた。

それほど何か大事な話があるんだろうか。思わず息を飲んだあたしの隣に幸は腰かけた。そのまま体育座りして、ただ俯いている。

「……人を起こしておいて何？マジ安眠妨害」

「『めんね。でもハツキリさせなきやつて思つてさ』」

ハツキリさせる？何を？あたしたちの間に何をハツキリさせるつて言つの？

もつ全て終わつたんじゃない。あたしはいつもやつて眠つている内にきつと消えていく。幸はそのまま現実世界で生きて行く。

大丈夫、現実世界では助けてくれる人がいるはずだ。

母さんに春哉に後藤先生、それに石原達也。あんたが怖がる必要なんて何もないんだよ。

あんたが笑つて“おはよつ。ありがとう。ばいばい。“『めんね”それだけ言えればいいんだよ。自分から話題出すとか難しい事はまだ考えなくていい。

挨拶と感謝と謝罪さえできれば、『ミニミニケーションは最低限成り立つ。まだあんたはその段階でいいんだから。何を悩む必要がある？

「幸、あたし考えたの。あたしは何のために存在してるんだつて」「え？」

「今更体を手に入れても、あたしには何もない。知能も常識も何もかも……体だけ成長して中身は小学生のままなの。感情のコントロールだつてうまくできるか分らない」

「幸……」

「でもそれは全部逃げた自分のせいつて分かつてゐるから、誰を責めるまでもない。でもね、そんなあたしの為に今まで頑張ってきた貴方がこうして不幸になるのはどうかなって思った」

今日の幸は凜としてる。少し情けないのは変わらないけど、でも今までよりは格段にしつかりしてゐる。「ううん、何かを覚悟してゐる。そんな感じだ。

ねえ、幸は何が言いたいの？

「何が言いたいの？」

「……幸、ちゃんと話しあいしよう。恨みっこなしで。どっちが表に出るか、どっちが消えるか」

どつちがつて……そんなの決まつてゐる。表に出るのはあんただよ。それは確實なんだよ。

だつてあんたが先の本人格、あたしは後から出てきた一重人格。そんなあたしが表に出ていい訳が無いじゃない。あんたが出てここの倉田幸じやん。

あたしは倉田幸の代理を務めてただけ。あんたの代わりをあんたが返つてくるまでやつてただけ。

少しだけ好き勝手にやらせてもらつたけど、そのルールはちゃんと遵守するよ。

「あんたが出なくてどうすんの？あんたが本人格じゃない」

「ねえ、本人格って何なの？それは誰が決めるの？先に出てきたあたしが本人格なの？それとも倉田幸として過ごしてきた時間が長い貴方が本人格なの？」

「それは……」

「あたしね、貴方になりきらなきやつて思つたの。貴方になりきら

なきや誰にも好かれないと。でも貴方と比べてしまつから、そんなことするなつて怒られちゃつた

それは誰の事言つてゐるの？母さんに言われたの？

幸は悲しそうに笑つたけど、泣く事はなかつた。いつもビービー泣いてたくせに、なんだか幸も大きくなつたな。無駄に親心にそう感じてしまつ。

「それに言われたの。幸を消してまで表に出たんだからしつかりしろつて。だから決めた。あたし、貴方との会話をこれで最後にする。貴方が表に出たら、あたしは綺麗をつぱり消えるし、あたしが表に出たら、貴方は綺麗をつぱり消えて。そしたらあたしは新しい倉田幸として生きる」

「それならあんたが表に……」

「それが幸の本心なの？幸は消えたくなつたんじゃないの？」

そう、消えたくなつた。まだまだ倉田幸でいたかった。春哉とたくさん笑いあいたかつた。春哉といつぱいどこかに出かけたかつた。母さんといつぱい話したかつた。いつぱいお出かけしたかつた。石原達と修学旅行を回りたかつた。短い10分休みにもつとたくさん話したかつた。

やり残したことはいつぱいある。でもそれを叶つ田は来ない、そう思つてた。でも幸は本心を言えつて言つてる。だからあたしはしまつてた胸の内を露わにした。

「あたしは……まだ消えたくなつた！まだやり残した事一杯ある！まだ倉田幸でいたい！まだ、まだ……まだ母さんや春哉に幸つて呼んで欲しい。あんたじゃなくて、あたしの事を！」

目に涙をためて声を荒げたあたしに、幸は表情を変えずに無言で眺

めていた。

初めて幸の視線が怖いと思った。幸は一体何を考えて何を思つて、あたしの事を見ているんだろう。馬鹿な奴だつて思つてるのかな、最低な奴だつて思つてるのかもしれない。

でも返つてきた言葉は全く別の言葉だった。

「さつさと言いなよ、すゞしく分かりづらい」

「え？」

「幸は消えたくなかったんでしょう？なににどうしてあたしを外に出したの？」

「だつてそれはあんたが本人格だからつて言ったじゃん」

「そう言うの関係なくない？幸がそう思つても本人格は皆貴方だつて思つてる。あたしね、言われてるの。つまらないつて、いつもみたいに突つ込んでつて」

幸の目からこぼれた水滴に目が丸くなる。あたしは幸をどれだけ傷つけてたんだろう。

自分ばっかり嘆いてた？幸を一方的に追い出したけど、幸を受け入れる体制を作つてなかつた。その結果、目の前にいるもう一人のあたしは深く傷ついたんだろう。

「分かつたんだ。10年は大きすぎた。どこにもあたしの居場所なんてない。だから作ればいいんだ、そう思つた。でももういいや」

「幸？」

「なんだか今ね、すごく悲しいけど嬉しい。自由になれるのは嬉しいけど、もう少し頑張れたら結末は違つたかなつて……」

幸の体が薄くなつていぐ。どういう事？まさか幸が消えるつて言つたの！？

慌てて掴んだ手を幸が握り返す。

「幸せになつてね。あたしが羨むくらいに……もうなつてるか」

「幸、消えたら」

「消えるんじやないよ。1つになるんだよ」

“ママと一々瀬君によろしく”

そう言葉を残して目の前にいたはずの、もう一人のあたしは姿を消した。実感が全くわからない。幸が本当に消えたのか、本当にあたしが本人格になつたのか。

幸の最後の言葉が胸を深く傷つけて、暫く膝に顔をうずめて泣いた。

それから何時間その場にいたか分からないけど、あたしは意を決して表に出る事にした。

目を開けた先には真っ白な天井、そして傍には後藤先生がいた。

「先生……」

「君はどうちの幸ちゃん?」

「先生が良く知ってる方」

「そうか。明るくて元気な方の幸ちゃんだね」

その言葉が嬉しくて、あたしは先生に抱きついて泣いた。先生は「お帰り」とだけ言って、ひたすらあたしをあやしてくれた。

どのくらい時間が立つてたのかな。あたしはまた取り戻せるのかな? 何も分からぬけど、幸がくれた残りの人生全てを悔いが無いように生きようと子供ながらに決意した。

何もかも取り戻すのが遅くなってしまった。でもまだ間に合つてしま

よ  
?

だつて夢は幻想から作られる物なんだから。

## 20 終わらない恋になれ

私が覚めたあたしは、また暫く病院に入院を余儀なくされた。まだ精神的に不安定だからって。確かにそうかもしね。だつて今でも何も考えてなくても胸が痛くて涙が出たから。季節は12月に変わり、木枯らしが吹いていた。

### 20 終わらない恋になれ

「幸、そう……貴方が幸なのね」

初めて母さんと面会をした時、母さんは涙を流しながらあたしを抱きしめた。

もう母さんは前の幸がどうとか、そんな事は言わなかつた。2人で一緒に幸せになろうね、それだけしか言わなかつた。  
母さんはあたしと2人で生きて行くつて言つてくれた。大切に育てたいつて。

有難う母さん、その言葉だけであたしは幸せだよ。

「あたしね、幸と話したんだ。幸せになるつて」

「うん、なろうね。絶対にお母さんが幸せにして見せるからね」

うん、あたしの世界の大部分は母さんから作られてる。学校の友達、そして……

思いだしたのは温かい笑顔、いつもあたしを包み込んでくれた優しい手、嫌味な事を全く言わない口。

春哉はどうしてるんだろう、春哉は今何をしてるんだらう。

あたしがいなくなつて幸せに生きてるのかな？それはそれで悲しいけど。

でも母さんの言葉を聞いて一刻も早く母さんに会いたくなつた。

「春哉君ね、一度家に来たのよ」

「春哉が？」

「うん、幸を助けられなかつた事を謝りに……優しい子ね。だからね、待つてあげてつて言つたの。そしたら彼、ずっと待つてるつて」

涙が出た。春哉はあたしを待つてくれている。あたしなんかを……春哉は約束を破らない。今でもあたしを待つてくれるんだ。泣きだしたあたしを抱きしめて、母さんは優しく語りかけた。

「幸、今度は貴方が迎えに行かないとな。ずっと迎えに来てもらつてばかりだつたもん」

「うん……」

「もう余所見しないで真つすぐ歩けるね」

「うん」

「でも辛くなつたら後ろを振り返つてここのよ。母さんが迎えに行つてあげるからね」

「うん」

母さんに抱きついて、わんわん泣いた。

母さんの前でこんなに泣くのは久しぶりのかも知れない。でも母さんは嫌な顔1つせずに、あたしを抱きしめてくれた。

ああ……あたしと幸は小さじこりからずつと、この手の優しさに憧れてた。

やつと手に入れた。優しい絶対的な存在を……

その後はリハビリを頑張った。勉強だって頑張った。そしてあたしが病院から出られたのは12月23。クリスマスイヴの前日だった。その日は夜遅くだったから、そのまま母さんと小さくお祝いをした。明日は母さんと2人でクリスマスを過ごす。そして明日、あたしは春哉に会いに行く。そう心に決めた。

12月24日に、あたしは貯まっていたメールを石原達に返した。すぐに電話がかかってきて、それに出た途端、藤田さんの感極まつた声が聞こえてきて、後ろで石原達が速く変われつて騒いでる。藤田さんと会話をして、藤田さんは石原と変わった。

「石原？」

「倉田さん大丈夫だつたのか？まさかの病弱設定？」

「そうだよ、あんたがあたしにストレスためさせつからだよ

「……ごめん」

「ん？」

「俺たち倉田さんに酷い事知らないうちに言つてたのかもしれない」

悲しそうな石原の声。そつか、幸は学校で馴染めないって言つてた。多分、石原もそれを感づいていた。石原はだからあたしに謝つ正在。

でもいいんだよ。あたしはむしろ遠慮ない言葉の方が気が楽なんだから。

「違うよ石原、救われたのはあたしだよ」

「倉田さん？」

「有難う」

「……修学旅行さ、俺達同じ班になつたから、1月学校来いよ。話し合わなきやいけない事あんだからな」

「任せて」

その後にも石原の友達と軽く会話をしても電話を切った。

修学旅行か……考へもしなかった。どうしよう、ずいぶん楽しめた。  
そしてその前に足りなきやいけない事がある。

あたしは服を着替えて軽く化粧をした。一番好きな人に不細工な顔  
は見せられないから。多分泣くだろうから、マスクカラとアイライン  
取れたらどうしようかな。

家に鍵をかけて外に出る。寒い風がむき出しの皮膚を攻撃したけど、  
それすらも何だか嬉しかった。

春哉の家の行き方は分かる。何度も前を通りたから。

今日は終業式だ。春哉は帰るかな？それとも友達と遊んでるのかな  
……あたしは息を大きく吸ってインター ホンを鳴らした。

出てきたのは春哉のおばさんだった。

おばさんは皿を丸くして、あたしに上がりてくれと言つた。

「「めんね、春哉まだ帰つてないの。今すぐ帰つてくれると思つた  
ど」

「いえ、いいんです。あたしもこんな時間に来たんですけど、出直  
します」

おばさんが出してくれたお茶とお菓子を食べて、あたしは頭を深く  
下げて立ち上がった。

おばさんは申し訳なさげな顔をして玄関まであたしを送り出してくれた。

そして歩き出したあたしに一葉をくれた。

「幸ちゃん、うちの息子をよろしくね」

「え？」

「春哉は貴方がいなことどうもなにから。ふふ……」んな可

愛い子を連れて来る日が来るなんて思わなかつたわ

「春哉はあたしに勿体ないくらい格好いい彼氏です」

「有難う、お世辞でも息子を褒められて悪い気はしないわ」

春哉は伯母さんにあたしの事を何かしら話してたんだりつ。でもおばさんの反応から悪い事は行つてないみたいだけど。

春哉に会いたい、会いたい。

何回も心の中で念じた。電話をすればいいんだけど、直接声が聞きたかった、電話だったらあたしは絶対に電話口で泣いてしまうから。

「幸……幸……！」

聞きなれた声、あたしが大好きな優しい声。

振りかえつた先にはずっと会いたかつた愛しい愛しい彼が立つていた。春哉はあたしの前まで走ってきて肩を掴んだ。どこにも行くなとでも言つよう。

果然としてたけど、春哉は何か思い出したように急に顔を真っ青にするもんだから何だか可笑しくてつい笑つてしまつた。

「倉田、さん？」

ああ、あたしを幸と間違えてるのか。

なんだかどこまでも春哉らしい、優しいね本当にあんたは。

「えらい他人行儀だね春哉」

「さ、ち……」

「他に誰かいる?」

春哉の腕の力が抜けてアホな顔になつてる。  
ねえ春哉、話をしよう。ずっとしなきやいけなかつた大事な話。

「え、どうして……俺……」

「話があるんだ。行こう」

春哉の手を握つて歩き出す。何も言わずにひいてくる春哉を人通りのない河川敷に連れしていく。

河川敷にはキヤツチボールをしてくる兄弟の様な子しかいない。ここならゆつくり話せそう。

河川敷に腰掛けて、少しだけ沈黙になる。

「幸……」

「ただいま春哉、あたしさ、精神病院にずっと入院してたんだよ。そこで幸と話し合った」

あたしから言わなきや。そう思つて春哉の声を遮つて、自分から言葉を発した。

でも話せば話すほど胸が痛くて、苦しくて、涙が出そうになつた。でも泣いたら駄目、駄目なのに。

幸の事を考えるとどうしようもなかつた。あたしのせいで幸は消えてしまつたも同然なんだから。もっとあたしが理解してあげてれば……

春哉に全部話して泣きだしたあたしを春哉は抱きしめてくれた。いつもこの腕に救われた。そして今回もこの腕に救われる。

春哉の肩が震えている、ああ春哉も悲しいんだな。ありがとう、一緒に悲しんでくれて。

「幸は消えた。あたしに身体を渡して消滅する道を選んだ」

春哉は黙つて聞いてくれる。抱きしめる腕の力が少し強くなるだけで。

ありがと、そうやつて春哉は全てを聞いてくれる。そして受け入れてくれる。翻弄に春哉に出会えてよかつたなあ、心肩そつ思えるよ。

顔を上げて春哉の目を見つめた。少しだけ充血した眼も全て愛おしい。

「だから幸と約束した。絶対に幸せになるつて」

「うん」

「……幸せにしてくれる？ 幸が羨ましがるくらいに」

「約束する。精一杯愛してやる。絶対に幸せにしてやる」

その言葉が欲しかった。幸せになりたかった。でもなれる、あたしでもなれるんだ。

春哉がいてくれる限りあたしは幸せだ。一緒に歩いてくれる人がいて、あたしを抱きしめてくれる母さんがいて、あたしを笑わせてくれる友達がいて……なんて幸せなんだろう。

「幸せにするよ絶対。今度も、修学旅行あるんだぜ」「知ってる」

「自由行動も、一緒にいよう。もう幸が隠すこと何もないよ。幸は幸なんだから」

「うん、うん……」

「俺が知ってる幸だ。やつと手に入れた」「あたしもやつと手に入れた……」

不意打ちで春哉にキスされた。どうか、もう拒む必要もないんだ。だつて全てあたしの物だから。

羨ましかつたらまた戻させてあげてもいいよ幸。春哉は譲らないけどね。

恥ずかしくて笑つたら、春哉も気恥しそうに笑つた。

終わらない恋になれ

「羨ましくなんかないよ。全くね」

どこかでそういう強がつた声が聞こえてきた気がした。  
実はあんたって強がりな奴だよね。

## 20 終わらない恋になれ（後書き）

ここまで読んでくださってありがとうございました。これもすへへ  
2人に幸あれ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4292n/>

---

幻想少年

2011年4月30日21時08分発行